

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第63集

# 吉田城址 (V)



2002年3月

豊橋市教育委員会

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第63集

よ し      だ      じょう      し  
吉 田 城 址 (V)

2002年3月

豊橋市教育委員会

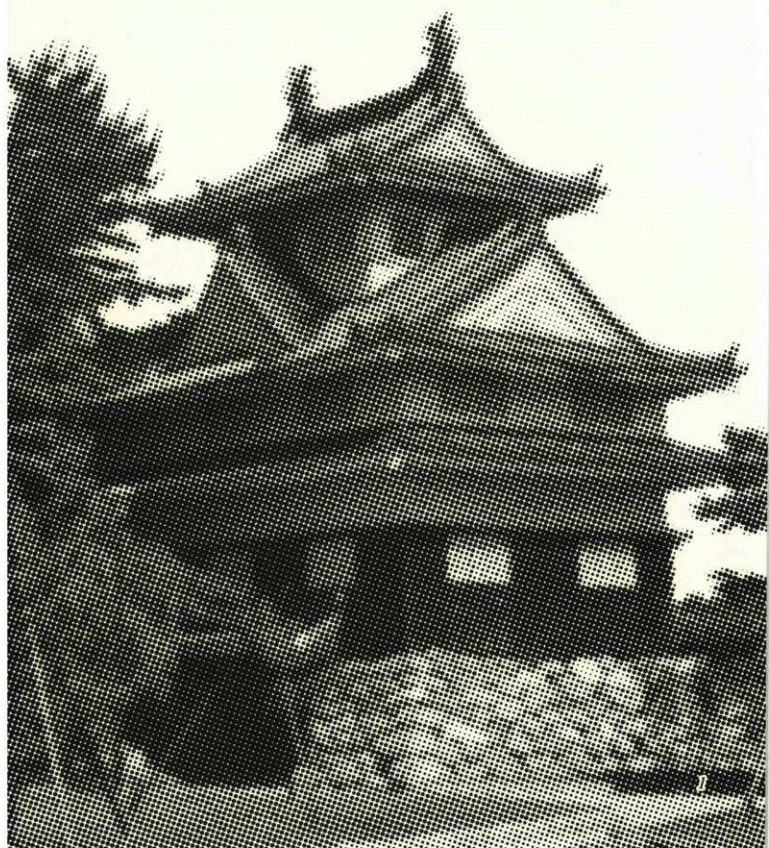
## 例 言

1. 本書は、豊橋市教育委員会及び豊橋遺跡調査会が行った吉田城址の第14次、15次、19次発掘調査及び立会調査の報告書である。
2. 発掘調査の調査箇所、期間、担当（職名は調査当時のもの）等の記録については、各本文の冒頭に記した。また、写真図版については最後にまとめた。
3. 発掘作業については、地元の方々のご協力を得た。また、報告書作成にあたり、遺構・遺物の実測・トレース等については山本純子・新本隆子・請井直美・村田陽子らの援助を受けた。写真撮影は、発掘調査に際しては各調査担当が、遺物撮影は各報告者が行った。
4. 本書の執筆に際し、藤澤良祐・佐野 元（財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター）、和田 実（豊橋市美術博物館）からご教示を頂いた。記して感謝の意を表す次第である。
5. 本書の執筆・編集は、「吉田城址の立地と歴史的環境」の執筆と編集を岩瀬彰利（豊橋市美術博物館学芸員）が行い、これ以外の各次調査については、各本文の冒頭に執筆の分担を記した。
6. 調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅷ系に準拠し、これを示した。本書に使用した方位は、この座標に沿うものである。遺構・遺物のスケールについてはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。
7. 本調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。

## 総 目 次

吉田城址の立地と歴史的環境	1
第14次調査	7
第15次調査	17
第19次調査	35
立会調査	57
報告書抄録	64

## 吉田城址の立地と歴史的環境



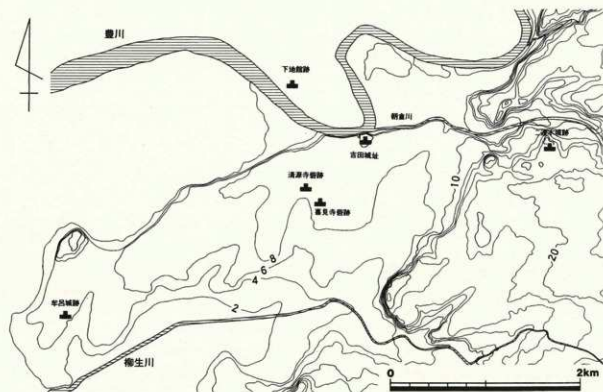
## 第1章 吉田城址の立地と歴史的環境

### 1. 吉田城址の立地 (第1図)

吉田城址は、豊橋市今橋町を中心に所在する城郭址である。近世には吉田藩主の居城となり、代々譜代大名が配置されていた。この吉田城址は、城郭以外にも縄文時代から近代までの遺構・遺物が確認されている複合遺跡である。

豊橋市は、市域が東を弓張山地、南を太平洋、西を三河湾、北を豊川によってそれぞれ限られている。東部の山地や北西部の沖積低地を除くと、市域の多くは豊川と旧天竜川によって形成された河岸段丘上にある。この河岸段丘は、大きくは高位面（天伯原面・標高30～60m）、中位面（高師原面～豊橋上位面・標高15～30m）、低位面（豊橋面・標高4～10m）の3面に分けることができる。

吉田城址は河岸段丘上にあり、前述した3面のうち低位面に立地している。この低位面は、他の段丘面に比べて形成年代が新しいため侵食は進んでおらず、その上面は比較的平坦となっている。城は、この低位面のうち、周囲よりも1～2m程高く小山状になった、豊川・朝倉川に浸食された段丘崖の縁辺を中心に築城されている。この地は標高10m前後で、北面する沖積地との比高差は7～8mを測る。このように吉田城址は平城に分類されるが、段丘崖を中心とした立地のため、城下や街道などの周囲を広く見渡すことのできる場所に在ると言える。またすぐ北側は、豊川・朝倉川に区切られるというような天然の要害地に築城されている。この場所は、洪水等に関する災害や水利・交通などの利便性を考慮すると、城郭立地としては最良の地であると言えよう。



第1図 吉田城址周辺地形図 (1/40,000)

## 2. 歴史的環境 (第2～4図)

吉田城址が立地する河岸段丘やその北側に広がる沖積低地には、縄文時代から近世にかけての遺跡が多く分布している。ここでは、吉田城址を中心に周辺の遺跡の概要について時代別に述べ、また吉田城の概要、更にはその後に設置された歩兵第十八聯隊について記すことにする。

### A. 周辺の遺跡 (第2図)

縄文時代のものは、吉田城址と同じ段丘上に石塚貝塚(14)があり、北方の沖積地に五貫森貝塚(2)、大蚊里貝塚(3)などがある。石塚貝塚は、ハイガイを主体とする前期中葉の貝塚で、東三河最古の貝塚である。貝層は厚さ30cm程で、前期中葉の縄文土器等が出土している。五貫森貝塚や大蚊里貝塚は、自然堤防上に形成されたヤマトシジミを主体とする晩期の貝塚である。その他には眼鏡下池北遺跡(20)・洗島遺跡(25)・おいほて遺跡(27)等で早期や中期の土器が少量だが出土している。

弥生時代のものは、飽海遺跡(17)、西側遺跡(24)、塩田遺跡(8)、緑遺跡(13)などがある。飽海遺跡は吉田城藩士屋敷内から発見された後期の遺跡であるが、調査は行われておらず詳細は不明である。蛇行する豊川を挟んだ吉田城址の対岸には、弥生土器が出土した緑遺跡が所在する。西側遺跡は、中期から後期の貝塚が伴う遺跡で、竪穴住居と考えられる遺構が確認され、比較的大きな集落と推測されている。

古墳時代のものは、集落址では熊野遺跡(19)で前期の竪穴住居が2軒、東田遺跡(32)では後期の竪穴住居が2軒見ついている。古墳では東田古墳(29)や稲荷山古墳群(18)等がある。東田古墳は中期の前方後円墳で全長40mを測り、後円部から鳥文鏡・大刀が、墳丘からは円筒・形象埴輪が出土している。稲荷山古墳群は、方墳を主体とした初期群集墳と考えられるものである。なお、過去の吉田城址の調査では、銅鏡・円筒埴輪等の遺物が出土したり、後期の竪穴住居が検出されており、城域内に古墳や集落の存在していた可能性が考えられる。

古代のものは、この時期の単純遺跡は見つかっていない。しかし、吉田城址内からは当該期の須恵器、土師器、灰胎陶器等の遺物が広範囲から出土している。この付近は、伊勢神宮領の飽海神戸・吉田御園があったとされ、また前々回の第17次調査区では柱穴の掘り方が方形の官衙的性格の高い総柱建物が検出されている。

中世のものは、熊野遺跡、東側遺跡(23)、西側遺跡などの台地上で小規模な集落跡が見ついている。なお宮井戸遺跡(4)、袋小路遺跡(5)などの沖積地に立地する遺跡からも、中世陶器や土師器が採集されており、集落が存在していた可能性は高い。中世城館では、戸田氏の築いた二連木城址(31)が台地縁辺部の現大口公園にあり、土塁、堀などが残っている。また、松平家康が吉田城攻めの際に築いたとされる喜見寺砦址(16)、清源寺砦址(15)などもあるが、市街地にあるため土塁等の遺構は消滅している。





- |         |            |           |            |
|---------|------------|-----------|------------|
| 1 吉田城址  | 2 五貫森貝塚    | 3 大蚊里貝塚   | 4 宮井戸遺跡    |
| 5 袋小路遺跡 | 6 ごんぞうぼう古墳 | 6 下川原遺跡   | 8 塩田遺跡     |
| 9 善蔵遺跡  | 10 為河原郷遺跡  | 11 北川原遺跡  | 12 下地館址    |
| 13 緑遺跡  | 14 石塚貝塚    | 15 清源寺砦址  | 16 喜見寺砦址   |
| 17 飽海遺跡 | 18 稲荷山古墳群  | 19 熊野遺跡   | 20 眼鏡下池北遺跡 |
| 21 中郷遺跡 | 22 中郷西遺跡   | 23 東側遺跡   | 24 西側遺跡    |
| 25 洗鳥遺跡 | 26 牛川焼窯跡   | 27 おいぼて遺跡 | 28 南牛川A遺跡  |
| 29 東田古墳 | 30 東郷遺跡    | 31 二連木城址  | 32 東田遺跡    |

第2図 吉田城址周辺遺跡分布図 (1/25,000)

## B. 吉田城の歴史と構造 (第3図)

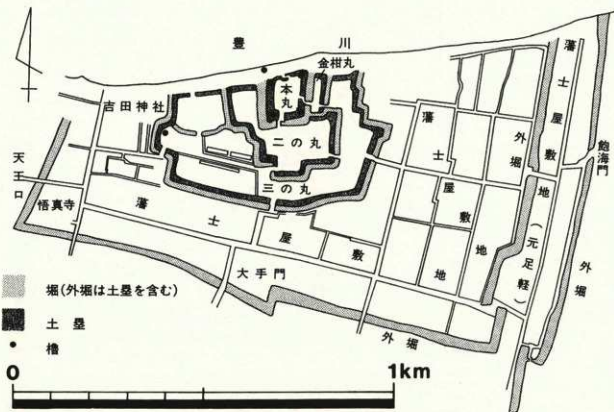
吉田城は、今川氏親の指示により牧野古白によって永正2(1505)年に築かれたとされる城である。当初は今橋城と称していたが、大永2(1522)年に牧野伝藏信成によって今橋は吉田に改められた。この地は、牧野氏・戸田氏・西郷氏・本多氏等の戦国武将が向かい合っており、16世紀はじめには戸田氏や牧野氏、西三河の松平氏による吉田城の争奪戦が繰り返された。その後は駿河の今川義元の領

有下となり、やがて徳川家康が三河を統一すると徳川側の家臣酒井忠次が入城した。酒井忠次は城下の整備に力を入れている。文献上に記述はないが、吉田城址第9次調査では16世紀中葉に掘削されたと考えられる堀が2条検出されており、この時期の城域拡張が推測される。

家康の関東移封後は、豊臣秀吉家臣の池田照政（後に輝政と改名）が城主となり、城域の拡張・整備、城下町の整備などを進めた。照政の吉田城整備はかつてないほどの大工事であり東西1,400m、南北600mに及んだが、工事未完成のまま姫路に転封している。その後は、譜代大名が入封したが、小祿のため城の維持に苦慮したと言われ、大規模な改修は行われていない。

吉田城の構造は、戦国時代は記録が乏しく詳細はわかっていないが、江戸時代の構造は現存する絵図「吉田藩士屋敷図」や地籍図等から復元することができる。縄張りについては、池田照政時代のものをほぼ踏襲していると言われており、背後の豊川を自然の要害とし、本丸を中心にして、二の丸、三の丸、藩士屋敷が取り囲む「半輪郭式」の構造をとる。また、本丸の北側には腰曲輪を置き、背後の攻撃に備えている。本丸は、東西約60m、南北約70mの規模で、内側を石垣で囲んでいる。なお、本丸の東側には金柑丸と呼ばれる曲輪があるが、中途半端な構造でその用途ははっきりしない。だが、ここが今橋城時代の本丸址との説もある。城内の石垣については、本丸周辺、門、木門、二の丸の堀の一部などに用いられたのみである。

三の丸と外堀の間は藩士屋敷が殆どを占めていた。幕末に描かれた吉田藩士屋敷図及び地籍図等を見ると、幕末時の吉田藩士屋敷の配置は、三の丸門周辺には家老西村邸などの藩最高位の屋敷が配置



第3図 近世吉田城の構造 (1/10,000)

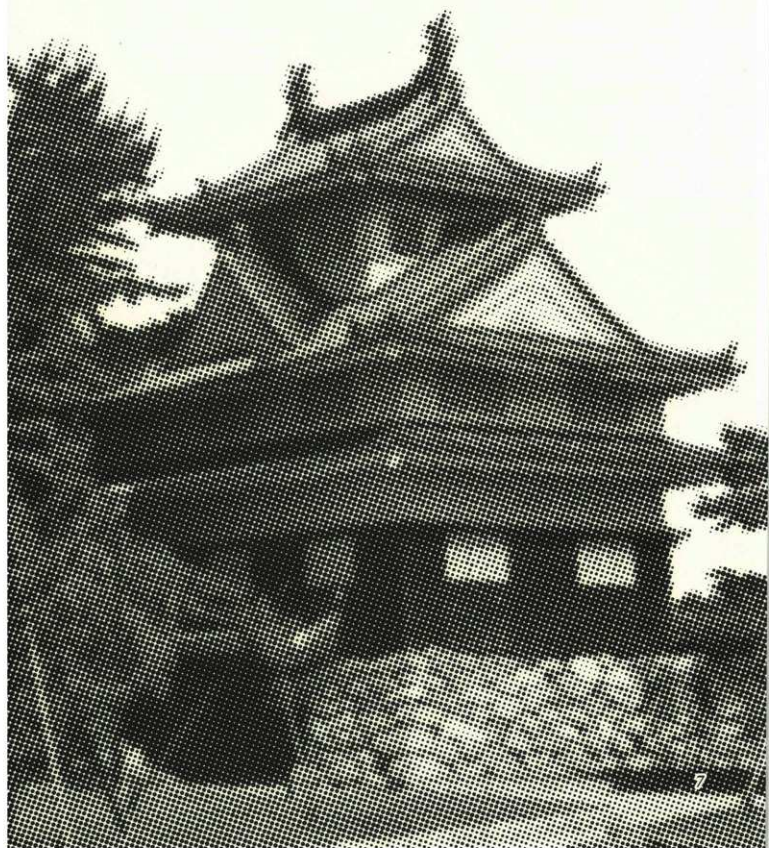


され、川毛門より延びる川毛通沿いにも中老などの上級藩士の屋敷が建ち並んでいる。これらのうち、第18次調査が行われた倉垣邸は、川毛通と八幡小路の交差する南東角地に位置し、南北約65m、東西約45m、面積約3,000㎡の大きな邸宅である。吉田藩の上級武士の屋敷地は面積が大きいものが多く、一説には池田照政が拡張した吉田城が後の小禄な普代大名には広すぎたため、各藩士にも広い屋敷が与えられたためとも言われている。これら多くの藩士屋敷も、屋敷地内の構造については描かれた図面等が残っていないため、詳細は不明である。

## 参考文献

- 豊橋市教育委員会他 1994 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集 吉田城址（Ⅰ）』  
豊橋市教育委員会他 1995 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第24集 吉田城址（Ⅱ）』  
豊橋市教育委員会他 1999 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第50集 吉田城址（Ⅲ）』  
豊橋市教育委員会他 2000 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第55集 吉田城址（Ⅳ）』

## 第14次発掘調査



## 第14次調査

所在地 八町通四丁目25番地

調査期間 平成8年8月21日～8月29日

調査面積 64㎡

調査理由 八町集会所建設

調査機関 豊橋遺跡調査会

調査担当 岩原 剛（豊橋市教育委員会文化振興課）

執筆 岩原 剛（豊橋市美術博物館学芸員）

目次	第1章 調査の経過.....	9
	第2章 遺構.....	10
	第3章 遺物.....	14

挿図目次	第1図 第14次調査区位置図（1/2500）.....	8
	第2図 第14次調査平面図（1/50）.....	12
	第3図 第14次調査遺構実測図（1/80）.....	13
	第4図 第14次調査出土遺物実測図（1/3）.....	16

表目次	第1表 第14次調査出土遺物観察表.....	15
-----	------------------------	----

## 写真図版目次

図版1-1	調査区全景（南から）	2	調査区南壁（北から）
	3 調査区東壁（西から）	4	SE-1（西から）
	5 SE-2（東から）		
2	第14次調査出土遺物		



第1図 第14次調査区位置図（1/2500）

## 第1章 調査の経過

### 1. 調査に至る経過 (第1図)

吉田城址は豊橋市の中心部に所在し、現在は三の丸内が豊橋公園となり、市民の憩いの場として利用されるほか、豊橋市役所などの官公庁や、豊橋市美術博物館など文化施設が所在している。さらに三の丸外の武家屋敷地はすでに市街地と化すなど、中心市街地としての活況を呈している。

第14次調査は、豊橋市水道局が主体となって実施した、八町ポンプ場の付随施設である八町集会所の建設に先立って、平成8年8月21日～8月29日にかけて行ったものである。調査面積は、集会所の建物部分に相当する64㎡である。なお、発掘調査は豊橋市水道局から委託を受けた豊橋遺跡調査会が実施し、発掘調査費用は原因者が負担した。

### 2. 調査の方法

調査はいずれも小範囲であり、基準点の設定は任意で行っている。

第14次調査では、調査区が1辺10mを越えないため、調査区内を分けることなく遺構の命名や遺物の取り上げなどを行った。また基準杭は実測図作成のために任意で設置した。

基本的な層序は、表土の下に歩兵第十八聯隊時代のものと思われる整地層があり、その下が地山となっている。しかし十八聯隊関連の遺構が整地層上で検出できなかったため、最終的な遺構検出は地山面で行っている。表土・整地層の除去には重機を使用し、その後人力で遺構の検出と掘り下げを行った。予想以上に遺構検出面が深かったこと、また大型の廃棄土壌の存在から、同一敷地内に設けた排土置き場の設定には苦慮した。なお、調査経過は次のとおりである。

8月21日 重機を使用して表土・整地層を除去する。

8月22・23日 遺構検出及び掘削作業を人力で行う。

8月26日 遺構掘削作業を終了し、高所作業車を使用して調査区の全景写真撮影を実施する。

8月28日 平面図及び調査区壁面の土層図を作成し、発掘調査を終了する。

調査地は、近世に吉田城の武家屋敷地だったところである。調査区の大半は、明治時代と近世の大型廃棄土壌で占められ、その周囲に柱穴や井戸などが分布している。恐らく廃棄土壌によって、本来存在した柱穴のいくつかは失われているだろう。

## 第2章 遺構 (第2・3図)

第14次調査区は、ほぼ8m四方の正方形を呈している。場所は吉田城三ノ丸南側、藩土屋敷地内に相当する。調査区のはほぼ全体で遺構が検出され、遺構検出面(地山面)の標高は約8mである。

主要な遺構には、調査区の大半を占める大型の廃棄土壌や土壌、井戸などがあるほか、柱穴と考えられるピットも存在する。大型廃棄土壌は幕末～明治期のもので、吉田城の廃城時～歩兵第十八聯隊の設置を前後する時期と言えるだろう。このほかの遺構は多くが近世のものだが、SE-2は戦国期～近世初頭まで遡る。なお柱穴は調査区の制約からか、規則的な配列をなすものは認められなかった。

### A. 井戸 (第3図)

井戸は2カ所が確認されている。いずれも調査区の端から検出されたため、全形を完全に把握することはできない。

#### SE-1

調査区の東端で検出されたもので、半分が調査区外になっている。またSK-1とは切り合い関係にあるが、遺構が深いため形状を著しく損なうことはない。

平面形はほぼ円形を呈すると思われるが、詳細は不明である。覆屋の柱穴など、周辺に関連施設は見いだせない。規模は直径約1.75mを測り、深さは完掘していないため不明である。埋土は灰褐色粘質土である。

出土した遺物には灰軸陶器の碗、陶器の碗・鉢、磁器の碗があり、遺構の時期は19世紀と思われる。

#### SE-2

調査区の南端で検出されたもので、一部は調査区外となっている。またSK-1とは切り合い関係にあるが、遺構が深いため形状を著しく損なうことはない。

平面形は南北に長い楕円形を呈し、覆屋の柱穴などの関連施設を周辺に見いだすことはできない。規模は長径1.7m以上、短径約1.5mを測り、深さは完掘していないため不明である。埋土は灰褐色砂質土である。

出土した遺物には土師器の皿があり、遺構の時期は16世紀末～17世紀初頭と思われる。

### B. 土壌 (第3図)

調査区の大半を占める大型廃棄土壌SK-1・13のほか、いくつかの土壌で遺物が出土しており、いずれも廃棄土壌と考えられる。多くは調査区の範囲の制約から、全形を把握できていない。

#### SK-1

調査区の東側一帯で検出された大型廃棄土壌で、南・東側は調査区外になっている。



平面形は長楕円形を呈すると思われるが、詳細は不明である。覆屋の柱穴など、周辺に関連施設は見いだせない。規模は長さ5.75m以上、幅3.4m以上を測り、底面は約30cmほどの高低差を成して北から南へ向けて下り傾斜となっているが、もっとも深いところで深さは約70cmを測る。埋土はほとんどが炭で、建築廃材と思われる燃えかすなども多数含まれている。このほか近代に位置付けられる遺物が出土したことから、遺構は吉田城廃城時の藩士屋敷を破却した際に設けられたものと思われる。

#### SK-13

調査区の中央付近で検出された大型廃棄土壌で、東側はSK-1に切られているほか、南側はSK-14・15と一部重複する。

平面形は長楕円形を呈し、覆屋の柱穴など周辺に関連施設は見いだせない。規模は長さ4.9m、幅3.05mを測る。底面は約15cmほどの高低差を成して北から南へ向けて下り傾斜となっているが、もっとも深いところで深さは約50cmを測る。埋土は灰褐色砂質土である。

出土した遺物には陶器の皿・摺鉢、磁器の皿・鉢があり、遺構の時期は19世紀前～中葉と思われる。

#### SK-14

調査区の南西隅で検出された廃棄土壌で、南・西側は調査区外となっている。

平面形は不明確だが、現状で規模は南北2.7m、東西1.1mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは約20cmを測るが、これはSK-1と重複するためであって、実際の深さは40cm以上はあるだろう。埋土は暗灰色粘質土である。

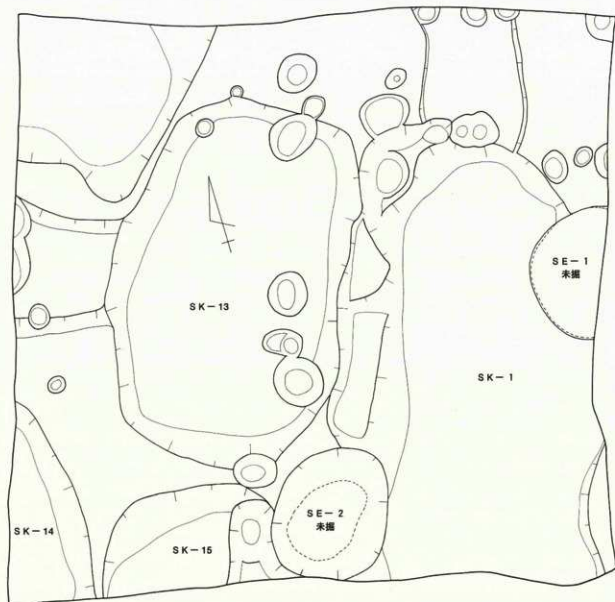
出土した遺物には陶器の碗・摺鉢・瓶掛、磁器の壺・そば猪口、土人形などがあり、遺構の時期は19世紀前葉と思われる。

#### SK-15

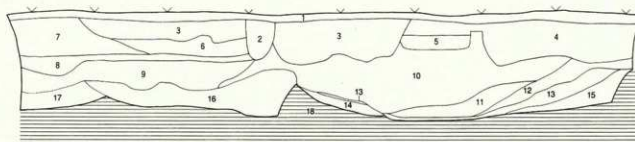
調査区の南側で検出された廃棄土壌で、SE-2に重複するほか、南側は調査区外となっている。

平面形は不明確だが、現状で規模は南北1.35m、東西2.25mを測る。断面形状は浅い皿状を呈すると思われ、深さは約30cmを測る。埋土は灰褐色砂質土である。

出土した遺物には陶器の摺鉢、磁器の碗・鉢などがあり、遺構の時期は19世紀前～中葉と思われる。



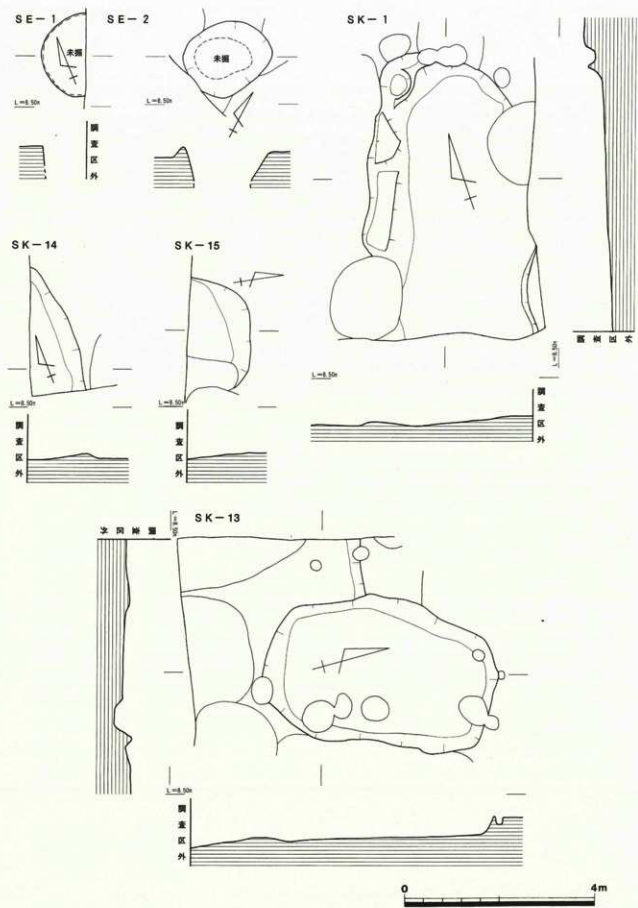
L=8 000x



- |              |                    |                     |
|--------------|--------------------|---------------------|
| 1. 砂石層       | 7. 黒灰色砂質土層 (黒褐色土が) | 13. 炭層② (瓦・ガラス層を含む) |
| 2. 暗褐色砂質土層   | 8. 茶褐色砂質土層 ( × )   | 14. 暗灰色砂質土層③        |
| 3. 暗茶褐色砂質土層① | 9. 暗灰色砂質土層① ( × )  | 15. 暗灰色砂質土層②        |
| 4. 暗茶褐色砂質土層② | 10. 暗灰色砂質土層② ( × ) | 16. 暗灰色砂質土層③        |
| 5. 炭層①       | 11. 褐色砂礫層          | 17. 暗灰色砂質土層④        |
| 6. 暗茶褐色砂質土層③ | 12. 暗灰色砂質土層①       | 18. 茶褐色砂礫層 (埋山)     |



第2図 第14次調査平面図 (1/50)



第3図 第14次調査遺構実測図(1/80)

### 第3章 遺物 (第4図・第1表)

第14次調査の出土遺物には灰軸陶器、中世陶器、陶器、磁器、瓦等があり、コンテナ箱(34×50×20cm)で2箱程度とあまり多くはない。その大半が幕末前後の陶磁器で占められており、このうち磁器については肥前系のものが主体を占める。なお、遺物の調整・法量等は第1表に示した。

#### SE-1 (1~5)

1は灰軸陶器の碗である。底部外面には回転糸切り痕が見られ、高台は垂直気味に立ち上がる。O-53-H-72室式期のものであろう。2は陶器の柳茶碗で、高台は削出し、体部の内外面に灰軸が施される。美濃産で19世紀前葉に位置づけられる。3は陶器の鉢で、鉄軸の後長石釉を施したいわゆる鼠志野である。戦国期の大窯第4段階〔瀬戸市史編纂委員会1993〕の終わりごろ、16世紀末葉に位置づけられる。4・5は肥前系磁器の染付碗である。4は直立した高い高台を持ち、年代は不詳。5はいわゆる「くらわんか碗」と呼ばれる雑器である。18世紀代のものであろう。

#### SE-2 (6・7)

6・7はいずれも土師器の皿である。6は口縁部が横ナアされ、底部は手づくねによる指頭圧痕が顕著である。底部外面にスガが付着する。7は口縁端部に面を持つ。吉田城址における土師器皿の編年〔豊橋市教育委員会1994〕から、いずれも16世紀末~17世紀初頭のものである。

#### SK-13 (8~11)

8は瀬戸美濃窯陶器の灯明皿で、口縁端部外面から内面にかけて灰軸が施される。9は同じく摺鉢で、口縁端部を肥厚させる。藤澤良祐の瀬戸美濃本業焼編年〔藤澤1989〕において、8は11小期・19世紀中葉、9は9小期・19世紀前葉に位置づけられる。10・11は肥前系磁器で、10は染付の小皿(手塩皿)、11は染付鉢である。10は口縁部が屈曲して直立し、内面にはうずらが描かれる。その特異な形態から、蓋物となる可能性も否定できない。11は腰が強く屈曲し、高台の端部は無軸である。後者は18世紀前葉のものと考えられる〔平凡社1988〕。

#### SK-14 (12~18)

12~14は陶器で、いずれも瀬戸産である。12は内面及び口縁部に灰軸、体部外面に鉄軸が施された腰膝碗である。13は摺鉢の口縁部で、緩やかに屈曲して断面形は段状を成している。13は瓶蓋で、内面には鉄軸がハケ塗りされ、外面は銅緑釉が施される。また底部の外周に見られる雷文はヘラ描きである。12は藤澤編年の10小期、13は同9小期でいずれも19世紀前葉、14は19世紀代に比定される。15~17は磁器の染付で、15が瀬戸美濃系と考えられるほかは、肥前系磁器である。15は盃で、内面に呉須で文字が書かれる。発色が鮮やかなコバルト呉須が使用されていることから、近代のものと考えられ、恐らく混入品だろう。16は腰の屈曲した鉢で、口縁は無軸である。17はそば猪口で、口縁部は波状を呈し、底部は無軸の広い高台を持つ蛇の目凹形高台である。16は18世紀前葉、17は19世紀前葉に比定されよう。18は土人形の顔面部である。土師質で、型押し成形されたものである。

## SK-15 (19~22)

19は瀬戸窯産陶器の摺鉢である。口縁端部を内側に折り曲げることで、内外面を肥厚させている。藤澤編年の9小期・19世紀前葉に比定される。20~22は染付である。19は磁器の端反碗で、胎土から瀬戸美濃系と推定される。21は美濃窯産の広東碗で、妬器質のものである。内面見込みに梅文が見られる。19世紀前葉に比定される。22は肥前系の鉢で、緩やかに腰の張った形状をとる。口縁部の内面は無軸である。18世紀代のものだろう。

## 表土 (23~25)

23は肥前系磁器の染付鉢で、体部は深い。内面の見込みにコンキヤク印判の五弁花文が見られる。17世紀後葉~18世紀代のものだろう。24は瀬戸美濃窯産の湯呑である。内外面にやや白濁した軸がかげられ、白泥による梅花文が見られる。19世紀中葉のものだろう。25は中世陶器の碗の底部である。渾美・湖西窯産で、比較的高台は高く、第5型式〔藤澤1994〕に比定されるだろう。

## 参考文献

瀬戸市史編纂委員会 1993 『瀬戸市史 陶磁史篇4』

豊橋市教育委員会 1994 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集 吉田城址(1)』

藤澤良祐 1989 「本茶碗の研究(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅷ』 瀬戸市歴史民俗資料館

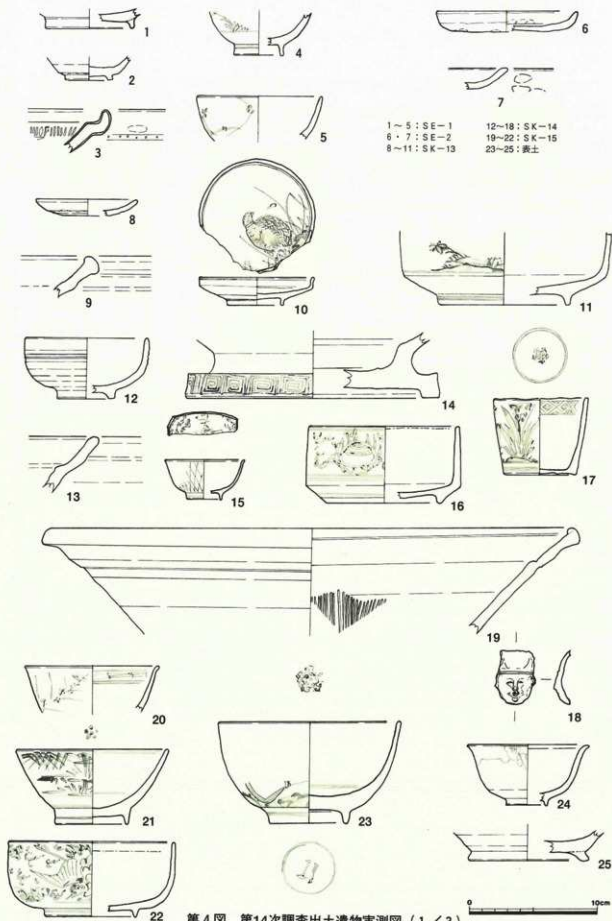
藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』 三重県埋蔵文化財センター

平凡社 1988 『別冊太陽No64 古伊万里』

第1表 第14次調査出土遺物観察表

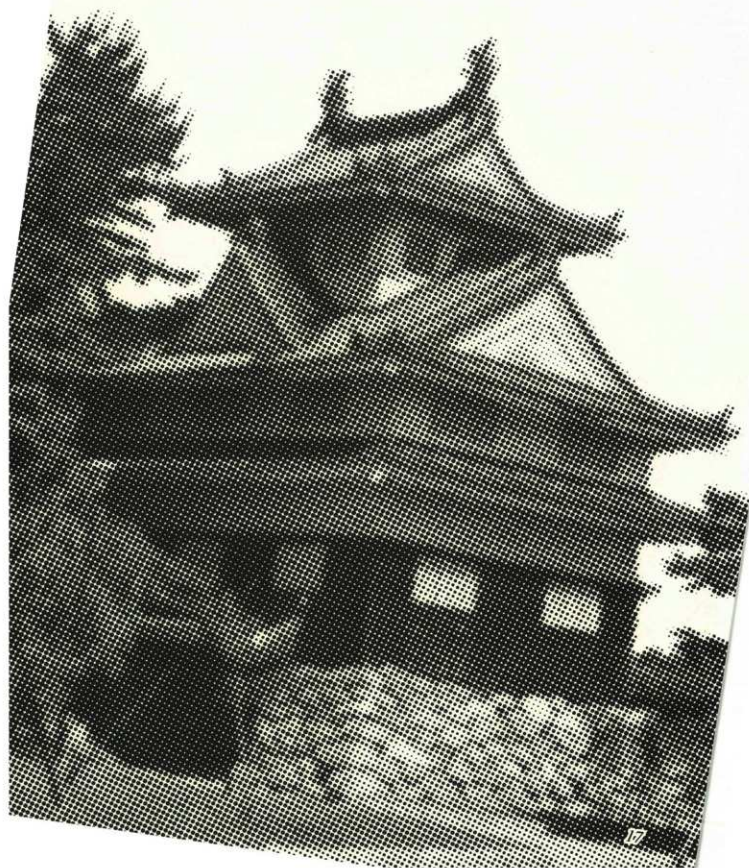
番号	遺物名	種類	器種	質量 (cm)		残存率 (%)	胎土	色調	焼成	調整	備考	
				口径	底径							
1	SK-1	灰釉陶器	碗	(1.6)	6.1	5	密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台取り付 げ残ナデ	O-53-H-72	
2	SK-1	陶器	碗	(1.9)	3.1	5	密	灰褐色	良好	回転ナデ、高台取り出し	灰釉、美濃窯産	
3	SK-1	陶器	鉢	(3.4)			密	淡灰色	良好	回転ナデ、内面に取り込みによる文様	鉄軸の長石軸、渾 美野、大室4	
4	SK-1	磁器	碗	(3.5)	3.8	30	密	淡灰白色	良好	回転ナデ、高台取り出し、外面に汎須 給	透明釉、肥前系	
5	SK-1	磁器	碗	9.3	(3.6)		15	密	淡灰白色	良好	回転ナデ、外面に汎須給 口縁部ココナデ、内面ナデ、外面磨 りさ	内面に雁付書
6	SK-2	土師器	皿	11.0	1.6		20	密	淡茶褐色	良好	口縁部ココナデ、内面ナデ、外面磨 りさ	
7	SK-2	土師器	皿	(1.7)			密	淡褐色	良好			
8	SK-13	陶器	灯明皿	7.9	1.2		30	密	淡褐色	良好	回転ナデ、底部外面回転ヘラ削り、内 面にトナシ跡	灰釉、瀬戸美濃窯 産、11小期
9	SK-13	陶器	煎鉢				密	淡褐色	良好	回転ナデ	鉄軸、瀬戸美濃窯、9 小期	
10	SK-13	磁器	小皿	9.3	2.2	4.3	70	密	淡灰白色	良好	回転ナデ、高台取り出し、内外面に汎須 給	透明釉、肥前系
11	SK-13	磁器	鉢	(5.6)	10.0		8	密	淡灰白色	良好	回転ナデ、高台取り出し、内外面に汎須 給	透明釉、肥前系
12	SK-14	陶器	磨鉢	9.4	4.8	4.6	30	密	淡褐色	良好	回転ナデ、高台取り出し	鉄軸、瀬戸美濃窯、10小 期
13	SK-14	陶器	磨鉢				密	淡褐色	良好	回転ナデ	鉄軸、瀬戸美濃窯、9 小期	
14	SK-14	陶器	煎鉢	(5.3)	19.8	25	密	淡褐色	良好	回転ナデ、底部回転ヘラ削り	外面汎須給、内面 鉄軸/ハケ塗り	
15	SK-14	磁器	盃	6.2	3.15	2.2	5	密	白色	良好	回転ナデ、高台取り出し、内面に汎須に よる文字、外面に汎須給	透明釉、瀬戸美濃 窯産
16	SK-14	磁器	碗	11.8	6.5	9.2	35	密	淡灰白色	良好	回転ナデ、高台取り出し、口縁部磨 り跡、外面に汎須給	透明釉、肥前系
17	SK-14	磁器	そば鉢(口)	7.2	6.2	5.4	50	密	淡灰白色	良好	回転ナデ、内外面に汎須給、磨鉢1跡、 底部蛇の目同白台、コンキヤク印判5弁 花文	透明釉、肥前系
18	SK-14	土師器	土人形				密	淡茶褐色	良好	製作り、内面にナデ・磨りさ		
19	SK-15	陶器	煎鉢	43.0	(8.3)		5	密	淡灰色	良好	回転ナデ、体部下位回転ヘラ削り	鉄軸、瀬戸美濃窯、9 小期
20	SK-15	磁器	端反碗	10.5	(4.2)		5	密	淡灰色	良好	回転ナデ、内外面に汎須給	透明釉、瀬戸美濃窯 産?
21	SK-15	磁器	広東碗	11.9	5.9	5.7	30	密	淡灰白色	良好	回転ナデ、高台取り出し、内外面に汎須 給	透明釉、美濃窯産、 妬器質
22	SK-15	陶器	鉢	13.0	6.0	7.0	40	密	淡灰白色	良好	回転ナデ、高台取り出し、外面に汎須 給	透明釉、肥前系
23	表土	磁器	鉢	14.2	8.1	5.9	60	密	淡灰白色	良好	回転ナデ、高台取り出し、内外面に汎須 給	透明釉、肥前系
24	表土	陶器	湯呑	9.3	4.1	3.1	30	密	淡茶褐色	良好	回転ナデ、高台取り出し、外面に梅花文	長石軸、瀬戸美濃窯
25	表土	中世陶器	碗	(2.5)	8.8	5.1	密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り		





第4図 第14次調査出土遺物実測図(1/3)

第15次発掘調査



## 第15次調査

所在地 八町通五丁目7番地

調査期間 平成8年9月2日～9月6日

調査面積 45㎡

調査理由 事務所建設

調査機関 豊橋遺跡調査会

調査担当 小林久彦（豊橋市教育委員会文化振興課）

執筆 岩原 剛（豊橋市美術博物館学芸員）

## 目次

第1章	調査の経過	20
第2章	試掘調査の成果	21
第3章	遺構	23
第4章	遺物	25
第5章	まとめ	33

## 挿図目次

第1図	第15次調査区位置図（1/2,500）	19
第2図	第15次調査地区割図（1/100）	20
第3図	試掘グリッド位置図（1/400）	22
第4図	第15次調査試掘出土遺物実測図（1/3）	22
第5図	第15次調査平面図（1/50）	26
第6図	第15次調査遺構実測図（1/80）	27
第7図	第15次調査出土遺物実測図-1（1/3）	29
第8図	第15次調査出土遺物実測図-2（1/3）	30
第9図	第15次調査出土遺物実測図-3（1/4）	31
第10図	藩士屋敷地と調査区の対照図（1/2,500）	33

## 表目次

第1表	第15次調査出土遺物観察表	32
-----	---------------	----

## 写真図版目次

- |        |                   |   |                   |
|--------|-------------------|---|-------------------|
| 図版 3-1 | 調査区全景-1 (西から)     | 2 | 調査区全景-2 (東から)     |
| 3      | B-1区SK-7付近 (南から)  | 4 | B-1区SE-1付近 (南から)  |
| 5      | B-1区SK-35付近 (南から) | 6 | 作業風景              |
| 4-1    | B-1区SE-1 (西から)    | 2 | B-1区SE-1断割り (西から) |
| 3      | B-1区SK-19 (西から)   | 4 | B-1区SK-43 (南から)   |
| 5      | B-1区SK-35 (東から)   | 6 | A-1区SK-1・2 (南から)  |
| 5      | 第15次調査出土遺物-1      |   |                   |
| 6      | 第15次調査出土遺物-2      |   |                   |



第1図 第15次調査区位置図 (1/2,500)

# 第1章 調査の経過

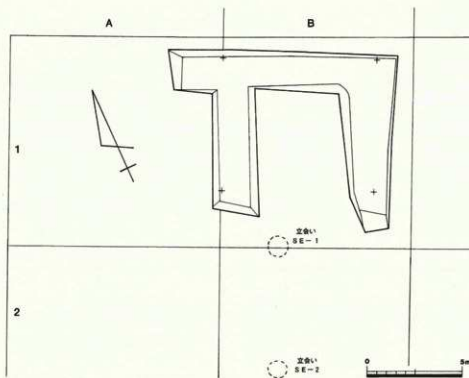
## 1. 調査に至る経過 (第1図)

第15次調査は、事務所建設に先立って行ったものである。試掘調査は平成8年1月11・12日に実施し、 $1 \times 2$  mを基本とする調査グリッドをほぼ等間隔に9カ所設けて行った。これにより、既存建物によって敷地の北辺を除いた部分は著しく攪乱を受けていることが判明している。本調査は第14次調査に続いて平成8年9月2日～9月6日にかけて行った。調査は遺構が良好に遺存する敷地北辺の事務所ピロティ建設予定地のうち、基礎により破壊される部分を対象としている。このため調査区の形状は変則的なものになった。調査面積は45 $\text{m}^2$ である。なお、発掘調査は事業者から委託を受けた豊橋遺跡調査会が行い、調査費用は事業者が負担した。

## 2. 調査の方法 (第2・5図)

前後するが、試掘調査については後述する。

第15次調査では、事務所ピロティの基礎部分のみを調査の対象としたため、幅2mほどの逆「ヒ」字形をした変則的な調査区となった。調査区の形状に合わせて任意の方向で10mメッシュで地区を設定し、各地区はアルファベットと数字の複合で表現し、遺構の命名や遺物の取り上げに対応させた。地区名は、調査面積が少ないためA-1区とB-1区の2区しかない。



第2図 第15次調査地区割図 (1/100)

基本的な層序は、表土層の下が地山となっているため、遺構の検出は地山面で行った。表土の除去を重機で実施したのち、人力で遺構の検出と掘り下げを行った。調査経過は次のとおりである。

9月2日 試掘調査の結果をもとに調査区を設定し、重機を使用して表土を除去する。

9月3・4日 地



区設定を行った後、遺構検出を実施する。

9月5日 遺構掘削終了。調査区全景および個別遺構の写真を撮影し、遺構平面図を作成して、発掘調査を完了する。

9月6日 調査区の南側で工事立会いを実施し、井戸2基を確認、SE-1・2とそれぞれ命名する。重機を使用して井戸の断割り調査を行い、遺物の収集につとめる。

調査地は、近世に吉田城の武家屋敷地だったところである。遺構の大半は近世のものであったが、中世陶器を伴う柱穴が若干見られたほか、A-1区SK-1は古代の竪穴住居の可能性がある。

## 第2章 試掘調査の成果

### 1. 概要 (第3図)

前述のように、遺構の残存状況を確認するため1×2mを基本とする試掘調査グリットを9カ所設けた。多くのグリットでは既存建物の建設による攪乱が認められたが、このうちG-1・3・4・7で遺構が確認され、調査区の北側を中心に遺構が遺存すると推定された。本調査ではこのうち、基礎によって破壊される事務所ピロティ部分を対象とすることにした。

各試掘グリットにおける遺構検出面は、本調査時と同様に地山面である。試掘グリットで確認された遺構は、柱穴や溝の一部、あるいは廃棄土壌の一部である。

### 2. 出土遺物 (第4図)

遺物は遺構が遺存した試掘グリットのほか、既に攪乱を受けたグリットからも若干出土したため、一括して掲載した。遺物の大半は近世の武家屋敷に伴うものである。以下、各グリットごとに出土遺物について説明する。なお、遺物の調整・法量等は第1表に示した。

#### G-3 (1~3)

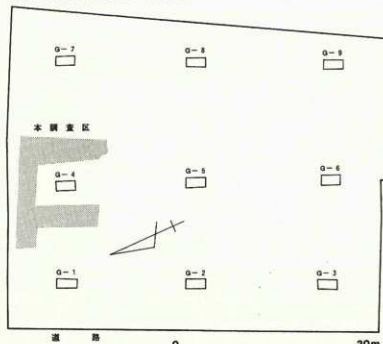
1は中世陶器の碗である。高台は低く潰れており、藤澤編年〔藤澤1994〕の7~8型式に比定されよう。2・3は瀬戸美濃窯産の陶器で、2は盃、3は摺鉢である。いずれも近世のものだろう。

#### G-4 (4~11)

4~7、9・10は瀬戸美濃窯産の陶器である。4は盃で、底部から口縁部が直立する。底部外面は回転糸切りされる。5は摺鉢で、藤澤良祐の本業焼編年〔藤澤1989〕の10小期・19世紀前葉に比定される。6は燗台と考えられ、内面の中央には恐らく芯立が存在したと推定される。底部は静止ヘラ削りされる。7は灯明皿で、器壁は比較的薄い。藤澤編年の10小期・19世紀前葉に比定される。9は鉢で、口縁部は強く内湾する。10は練鉢で、口縁部を強く外反させている。藤澤編年の9小期、19世紀前葉に比定される。8は焼壺蓋の蓋で、上面には布目痕が見受けられる。11は肥前系磁器の染付碗である。18世紀代のものだろう。

G-5 (12・13・15)

12は常滑窯産陶器の鉢で、口縁端部は平坦になる。13は骨角器の不明製品で、断面形は扁平である。恐らくかんざしであろう。15は瀬戸美濃窯産陶器の練鉢で、高台は低い。藤澤編年の9小期、19世紀前業に比定されるものである。



第3図 試掘グリッド位置図 (1/400)

G-6 (14)

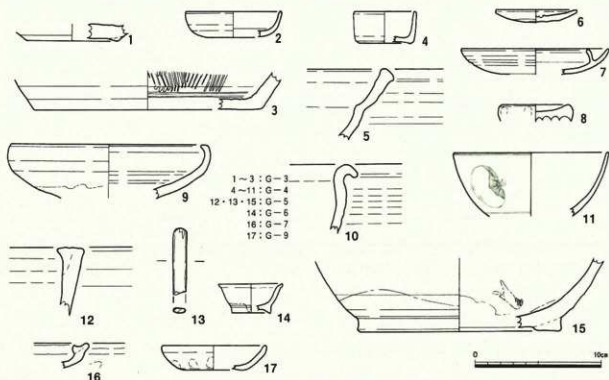
14は瀬戸美濃窯産陶器の壺である。底部は削り出され、口縁部は強く外反する。橋崎編年〔瀬戸市教育委員会1990〕の連房Ⅱ期・17世紀中葉に比定される。

G-7 (16)

16は土師器の焙烙である。口縁端部は強くナデ押えることで窪ませる。近世のものである。

G-9 (17)

17は土師器の皿である。手づくね成形され、外面には指頭圧痕が等間隔に見られる。器形が深いことから近世のものと思われる。



第4図 第15次調査試掘出土遺物 (1/3)

## 第3章 遺構

第15次調査区は、南北約8m、東西約11mの逆「匕」の字形を呈した変則的なものである。場所は吉田城三ノ丸の南側、藩士屋敷地内に相当する。調査区のはほぼ全体で遺構が検出され、遺構検出面（地山面）の標高は第14次調査区とほぼ同様の約8mである。

主要な遺構には、櫓、土塼、井戸などがあるほか、建物としては認定できなかったが、柱穴と考えられるピットも存在する。大半の遺構は近世の藩士の屋敷地に関わるものだが、SE-1は戦国期～近世初頭に設けられたものであり、古代の竪穴住居の可能性のある土塼も検出されている。なお本調査後の建設工事立会い中に、2基の井戸（立会いSE-1・2）が検出された。いずれも上部はすでに攪乱を受けていた。

### A. 櫓（第6図）

今回の調査区では柱穴がいくつか確認されているが、規則的な配列を示す遺構は櫓と考えられるSA-1のみであった。

#### SA-1

調査区の東側で検出された6間の櫓で、途中直角に屈曲している。主軸方位はN-10°-Eを測る。規模は全長で8.0mを測り、柱間は1.2・1.3・1.4mである。柱穴は平面形が円形・楕円形を呈し、径0.2～0.4m、深さは0.4mほどである。柱穴の埋土は暗灰色砂質土である。出土遺物としてP5から磁器の集付碗が出土しており、建物の主軸も後世の屋敷地割りにほぼ合致することから、遺構の時期は近世であろう。

### B. 井戸（第2・6図）

井戸は調査区で1基が検出されたほか、工事立会いに際して2基が確認されている。SE-1は調査後に重機を使用して断ち割りを実施し、遺物の採集に務めている。

#### SE-1（第6図）

調査区の南東側で検出されたもので、ほぼ全形が確認されている。平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径約1.9mを測り、覆屋の柱穴など周辺施設は確認されていない。深さは不明である。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には中世陶器の碗、陶器の碗・皿・摺鉢があり、遺構の時期は16世紀後葉～17世紀初頭と思われる。

#### 立会SE-1・2（第2図）

本調査の終了後、調査区の南端から南へ2mほどと、8mほど離れた位置から、各1基づつ井戸が検出されたため、前者を立会SE-1、後者を同SE-2と命名した。いずれも既存の建物によって

上部は破壊されていたが、下部は良好に遺存していた。SE-1は直径約1.2mの円形、SE-2は長径1.7m、短径1.2mの楕円形を呈する。出土遺物として、SE-1から板状の不明木製品が、SE-2から土師器の皿、陶器の碗、木製箸などがあり、遺構の時期は近世と思われる。

## B. 土壌 (第6図)

土壌は平面形が不整形な大型のものをはじめ、柱穴、古代堅穴住居の一部と考えられるものについても一括し、説明する。なお、ここでとりあげたのは主に遺物が出土した遺構である。

### A-1区SK-1

調査区の西側で検出された土壌で、A-1区SK-2に一部重複している。平面形は長楕円形を呈し、規模は長径0.7m、短径0.5m、深さは15cmを測る浅い土壌である。埋土は暗灰色砂質土である。出土した遺物には中世陶器・碗の底部があり、遺構の時期は13世紀後葉と思われる。

### A-1区SK-2

調査区の西端で検出された遺構で、南側と西側は調査区外となっているほか、東側はA-1区SK-1と重複している。平面形はコーナーを持つように見受けられることから、本来は方形を呈すると考えられ、埋土は淡灰褐色砂質土である。規模は東西1.4m以上、南北1.6m以上、深さ15cmを測り、A-1区SK-1が後から掘り込まれることから中世以前の、恐らく古代の堅穴住居と考えられる。

### B-1区SK-7

調査区の中央で検出された土壌で、2つの柱穴が重複したものだろう。平面形は長楕円形を呈し、規模は長径0.6m、短径0.5m、深さ30cmを測る。埋土は暗灰色砂質土である。出土遺物には須恵器片があり、遺構の時期は古代以降と思われる。

### B-1区SK-19

調査区の東側で検出された土壌で、SA-1と重複している。北側は一部が調査区外となっている。平面形は溝状を呈し、規模は長さ4.9m、幅2.6m、深さ30cmを測る。埋土は暗灰色砂質土である。出土遺物には陶器の碗・片口・甕・摺鉢・植木鉢・水盤・陶錘、磁器の碗、土師器の焙烙などがあり、遺構の時期は19世紀中～後葉と思われる。藩士屋敷の廃絶時に設けられた廃棄土壌だろう。

### B-1区SK-22

調査区の東端で検出された土壌である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺0.7m、深さ0.8mを測る。底には円形の板材が敷かれ、北隣にはタタキが張られた平坦面が見られる。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には板材のほか、陶器の鉢がある。近世のトイレ遺構と考えられる。

**B-1区SK-32**

調査区西側の張り出し部で検出された土壌で、西側は調査区外になるほか、B-1区SK-35に一部重複している。平面形は長楕円形を呈し、規模は長さ0.85m、短径0.6m、深さ20cmを測る柱穴である。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には磁器の碗があり、遺構の時期は近世である。

**B-1区SK-35**

調査区西側の張り出し部で検出された大型の土壌で、東西は調査区外になっている。本来の平面形は不明だが、調査区内で確認された幅は長さ3.8m、深さは0.15mを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。出土遺物には陶器の碗や銅装の小柄があり、遺構の時期は18世紀後葉と思われる。ここからの出土遺物がSA-1のP5出土遺物と接合しており、両者は同時期のものと思われる。

**B-1区SK-48**

調査区東側の張り出し部付け根で検出された土壌で、B-1区SK-19と重複している。平面形は円形を呈し、規模は径0.4m、深さ20cmを測る柱穴である。埋土は暗灰色砂質土である。出土遺物には磁器の碗があり、遺構の時期は19世紀中～後葉と思われる。

## 第4章 遺物 (第7～9図・第1表)

第15次調査の出土遺物には中世陶器、陶器、磁器、土師器、瓦、木製品等があり、コンテナ箱(34×50×20cm)で5箱程度とあまり多くはない。その大半が幕末前後の陶磁器で占められている。なお、遺物の調整・法量等は第1表に示した。

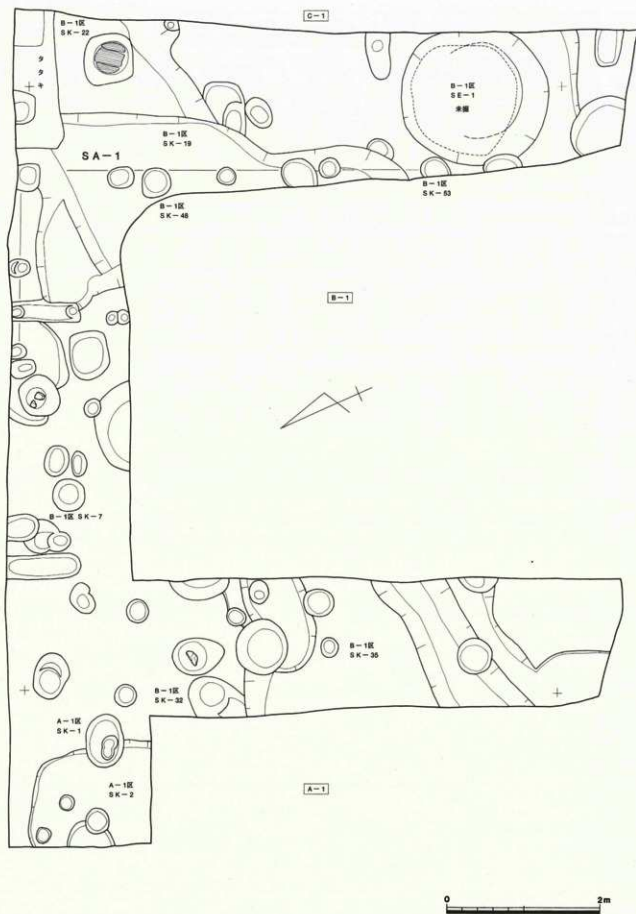
**SA-1 (1)**

1は磁器の染付碗である。外面上部には雷門が見られる。胎土は瀬戸美濃窯産磁器に似る。19世紀のものだろう。

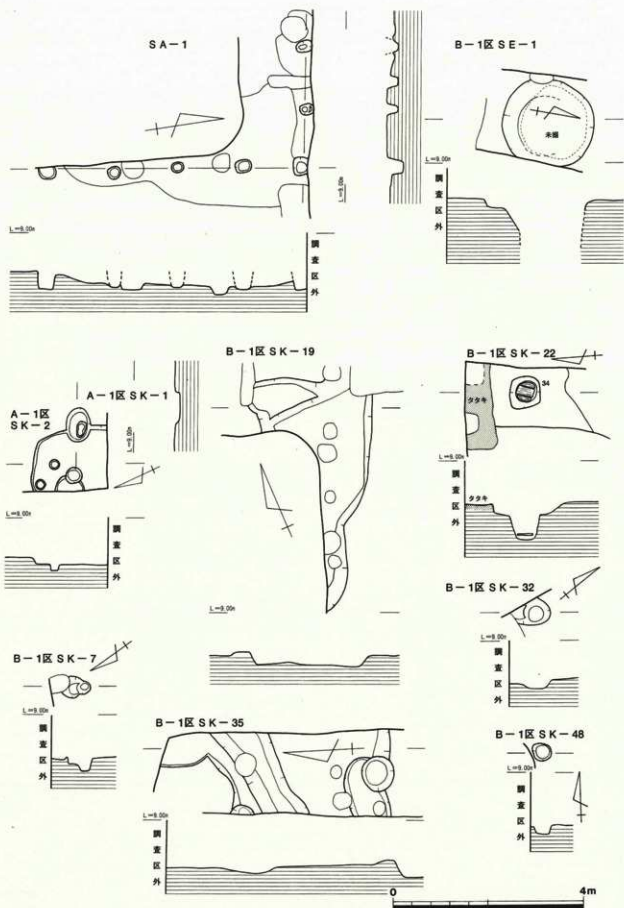
**SE-1 (2～7)**

2は陶器の丸碗である。内外面に鉄軸が施され、高台は削り出しである。瀬戸美濃窯産で、藤澤良祐の瀬戸美濃本業焼編年〔藤澤1989〕の1小期に比定される。3は中世陶器の碗で、高台がやや高く、接地面にはモミ痕が見られる。渥美・湖西窯産で、藤澤良祐の山茶碗編年〔藤澤1994〕における6～7型式に比定される。4～7は瀬戸美濃窯産の陶器である。4は天目茶碗で、内外面に鉄軸が施される。5は端反皿で、口縁はわずかに外反し、内外面に灰軸が施される。6・7は摺鉢で、いずれも口縁端部を肥厚させて口縁帯を形づくる。4と6は大窯3段階前半、5は同後半、7は大窯4段階前半〔瀬戸市史編纂委員会1993〕にそれぞれ比定されよう。





第5図 第15次調査平面図 (1/50)



第6図 第15次調査遺構実測図 (1/80)

**A-1区SK-1 (8)**

8は中世陶器の碗である。高台は低く、体部は斜め上方へ直線的に立ち上がる。渥美・湖西窯産で、山茶碗編年の7～8型式に比定される。

**B-1区SK-7 (9)**

9は須恵器の破片である。外面には平行タタキ目が見られ、内面はヘラ削りされる。

**B-1区SK-19 (11～23)**

11～15、19～21は陶器である。11・12は片口で、11が瀬戸窯産、12が美濃窯産である。いずれも内外面に灰軸が施される。13は碗で、高い削出し高台に丈高の体部が付く。内外面には灰軸が施される。産地不詳。14は瀬戸窯産の甕で、内外面に鉄軸が施される。15は瀬戸窯産の摺鉢である。19は瀬戸窯産の植木鉢で、外面に灰軸が施され、内面は鉄軸がハケ塗りされる。20は瀬戸窯産の水盤で、鉄軸と銅緑軸とが掛け分けられ、さらに全面に灰軸が施されている。21は無軸の陶器で、口縁部は内面に折り返され、底部外面は未調整である。常滑窯産だろう。12は藤澤編年の9小期、15は11小期以降に比定されるほか、ほとんどが19世紀代のもので占められている。16・17は磁器の壺である。16は肥前系、17は産地不詳で、盛りつけたように鮮やかな青色の呉須絵が見られる。18は常滑窯産の陶鐘である。22は土師器の焙烙で、口縁端部には中間をくぼませた面が見られる。また内耳の片方は塞がっており、用をなしていない。23は瓦の不明品で、屋根の頂に使用された飾り瓦と考えられる。

**B-1区SK-22 (10)**

10は陶器の鉢である。無軸の赤焼け陶器で、口縁部は鐔状に広がっている。常滑窯産であろう。

**B-1区SK-32 (24)**

24は磁器の碗である。外面に呉須による花卉状の文様が見られる。生焼けのため、肉眼観察による産地推定は困難である。

**B-1区SK-35 (25・26)**

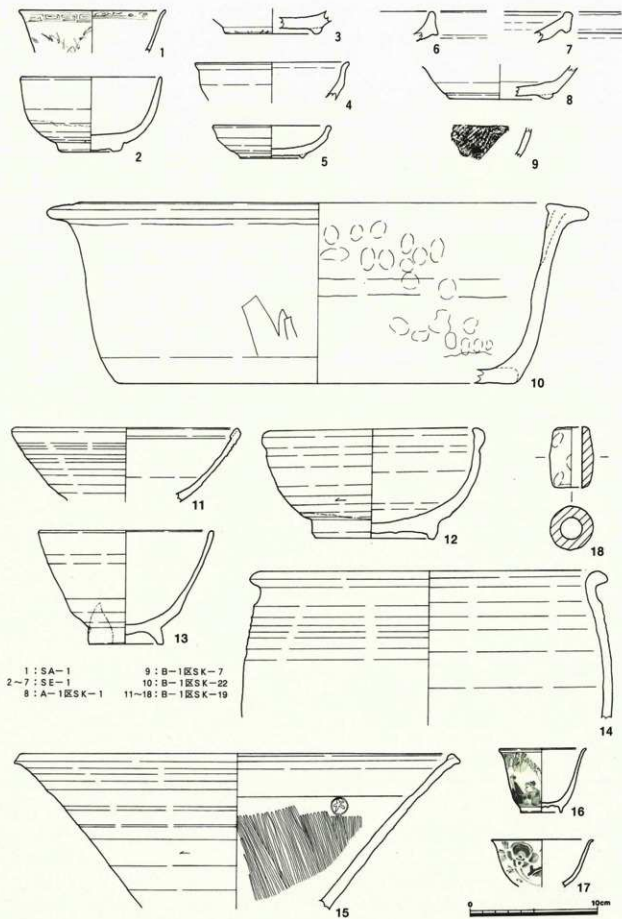
25は陶器の碗である。内外面に灰軸が施され、外面には鉄絵が見られる。京都・信楽系のもので、18世紀後葉に位置づけられる。26は小柄で、柄には銅板を巻いている。刃部はほとんど欠損している。

**B-1区SK-43 (34)**

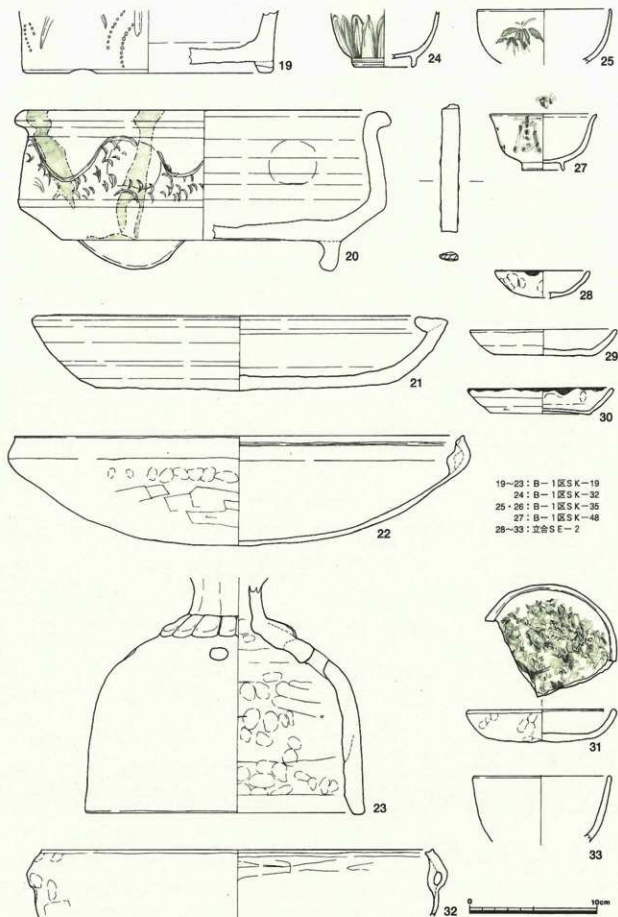
34は2種類以上の板材を円形になるよう組み合わせて、土壇の底板にしていたものである。自然科学的な検討を経たわけではないが、周辺の状況から、トイレ遺構の底板と考えられる。

**B-1区SK-48 (27)**

27は磁器の碗である。口縁部は強く外反し、体部外面に呉須絵が見られるほか、口縁端部には鉄軸



第7図 第15次調査出土遺物実測図-1 (1/3)



第8図 第15次調査出土遺物実測図-2 (1/3)



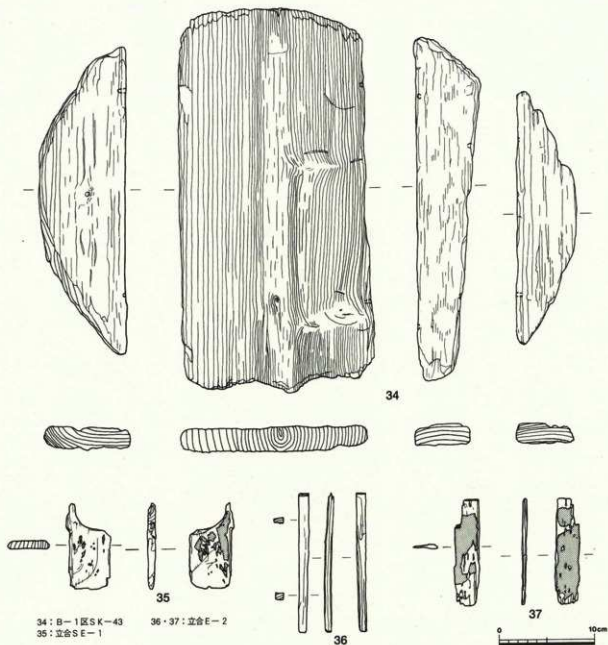
が施される。19世紀中～後葉の瀬戸美濃窯産と考えられる。

#### 立会SE-1 (35)

木製の板材である。用途は不明で、上部は円形に挟り込まれている。外面には漆が見受けられる。何らかの製品の部材であろう。

#### 立会SE-2 (28～33・36・37)

28～31は土師器の皿である。このうち28・31は手づくね整形、29・30はロクロ整形である。28と30は口縁端部に、29は内面見込みに、31は口縁部の内外面にススが付着する。31は内面の見込み全体に手習いの墨書が見られる。32は土師器の鍋で、半球形を呈した内耳鍋である。33は陶器の碗で、内外



34: B-1区SK-43  
35: 立会SE-1

36・37: 立会E-2

36

37

第9図 第15次調査出土遺物実測図-3 (1/4)

面に灰朽が施される。肥前系の、いわゆる御器手の碗である。36は木製の箸である。37は木製の板材で、上部に直径1.5mmほどの円孔が2カ所穿たれている。表面には漆が観察される。

## 参考文献

瀬戸市教育委員会 1990 「尾呂」

瀬戸市史編纂委員会 1993 「瀬戸市史 陶磁史篇 4」

藤澤良祐 1989 「本業焼の研究」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』 瀬戸市歴史民俗資料館

藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』 三重県埋蔵文化財センター

平凡社 1988 「別冊太陽No64 古伊万里」

第1表 第15次調査出土遺物観察表

内容	番号	プロット	遺物の	種類	器種	径 (cm)			高さ	体積	重量	出土	色	素地	特徴	調査	備考	
						口径	底径	最大径										
試掘	1	G-3	土塊	中野陶器	碗		(1.3)	7.1					紫	淡灰色	良好	回転ナズ、底縁回転ヘラナズ形	藤澤7-8型式	
試掘	2	G-3	土塊	陶器	盆	7.4	2.0			30			紫	淡灰色	良好	回転ナズ、底縁回転ヘラナズ形	試験、瀬戸窯産	
試掘	3	G-3	表土	陶器	煎鉢	(5.0)	18.0			30			紫	淡灰色	良好	回転ナズ、底縁回転ヘラナズ形	試験、瀬戸窯産	
試掘	4	G-4	表土	陶器	盆	4.8	2.5	3.9		30			紫	淡灰色	良好	回転ナズ、底縁回転ヘラナズ形	試験、瀬戸窯産	
試掘	5	G-4	表土	陶器	煎鉢		(5.5)			30			紫	淡灰色	良好	回転ナズ	試験、瀬戸窯産	
試掘	6	G-4	表土	陶器	湯瓶?	6.4	(1.0)			45			紫	淡白色	良好	回転ナズ、底縁扁平ヘラナズ形	内面のみ試験、瀬戸窯産	
試掘	7	G-4	表土	陶器	片切皿	11.5	(2.0)			15			紫	淡茶褐色	良好	回転ナズ	試験、瀬戸窯産	
試掘	8	G-4	表土	土師器	埴輪香爐	5.4	(1.3)			30			紫	淡褐色	良好	ナズ、唇押え、上面に帯状彫	試験、瀬戸窯産	
試掘	9	G-4	表土	陶器	鉢	14.4	(4.2)			20			紫	淡褐色	良好	回転ナズ、底縁回転ヘラナズ形	試験、瀬戸窯産	
試掘	10	G-4	表土	陶器	鉢鉢	(5.5)				30			紫	淡灰色	良好	回転ナズ	試験、瀬戸窯産	
試掘	11	G-4	表土	埴輪	笠付筒	12.3	(5.0)			45			紫	淡白色	良好	回転ナズ、外面に片状彫	試験、瀬戸窯産	
試掘	12	G-5	表土	陶器	鉢	(5.0)				30			紫	暗褐色	良好	コゴナ	試験、瀬戸窯産	
試掘	13	G-5	表土	骨角器	かんざし?	長さ	5.2(1.2)	厚さ	0.4									
試掘	14	G-6	覆土	陶器	盆	5.1	2.3	3.0		25			紫	淡褐色	良好	回転ナズ、底縁削り出し高台	試験、瀬戸窯産	
試掘	15	G-6	表土	陶器	鉢鉢	(5.8)	15.8			15			紫	淡白色	良好	回転ナズ、底縁削り出し高台	試験、瀬戸窯産	
試掘	16	G-7	表土	土師器	煎鉢	(2.0)				30			紫	淡褐色	良好	回転ナズ	試験、瀬戸窯産	
試掘	17	G-9	覆土	煎鉢	皿	8.1	1.9			20			紫	淡褐色	良好	内面に及び縁部外面ナズ、底縁外面に連続した彫刻痕	試験、瀬戸窯産	
本調査	1	B-1	S A-1	編器	碗	11.4	(5.4)			5			紫	淡灰色	良好	回転ナズ	試験、瀬戸窯産	
本調査	2	B-1	S E-1	陶器	丸筒	11.0	5.9	4.9		50			紫	淡褐色	良好	削り出し	試験、瀬戸窯産	
本調査	3	B-1	S E-1	中野陶器	碗	(1.2)	7.6			30			紫	淡灰色	良好	回転ナズ	試験、瀬戸窯産	
本調査	4	B-1	S E-1	陶器	天目茶碗	12.1	(3.1)			5			紫	淡灰色	良好	回転ナズ	試験、大塚7-19筒	
本調査	5	B-1	S E-1	陶器	煎鉢					30			紫	淡灰色	良好	回転ナズ、底縁回転ヘラナズ形、高台	試験、大塚7-19筒	
本調査	6	B-1	S E-1	陶器	背鉢	8.95	2.5	4.9		10			紫	淡茶褐色	良好	回転ナズ	試験、大塚7-19筒	
本調査	7	B-1	S E-2	陶器	湯鉢					30			紫	淡褐色	良好	回転ナズ	試験、大塚7-19筒	
本調査	8	B-1	S E-2	中野陶器	碗	(2.6)	7.7			5			紫	淡灰色	良好	回転ナズ、底縁削り出し高台ナズ	藤澤7-8型式	
本調査	9	B-1	S E-7	煮物器						30			紫	灰色	良好	外面ホコナ、内面ヘラナズ形	試験、瀬戸窯産	
本調査	10	B-1	S E-22	陶器	鉢	36.8	10.6	30.0		20			紫	赤褐色	良好	未調査、内面ナズ・唇押え	無験、京産	
本調査	11	B-1	S E-19	陶器	碗	17.7	(5.8)			30			紫	淡褐色	良好	回転ナズ、体部下回転ヘラナズ形	試験、瀬戸窯産	
本調査	12	B-1	S E-19	陶器	片口	16.1	8.7	9.8		45			紫	灰色	良好	削り出し、内面にトナリ筋	試験、大塚7-19筒	
本調査	13	B-1	S E-19	陶器	片口	13.6	9.0	5.9		55			紫	淡褐色	良好	削り出し	試験、瀬戸窯産	
本調査	14	B-1	S E-19	陶器	碗	26.8	(11.6)			30			紫	淡褐色	良好	回転ナズ	試験、瀬戸窯産	
本調査	15	B-1	S E-19	陶器	煎鉢	34.0	(12.2)			20			紫	淡褐色	良好	回転ナズ、体部下回転ヘラナズ形	試験、瀬戸窯産	
本調査	16	B-1	S E-19	編器	湯鉢	6.8	3.1	3.2		30			紫	白色	良好	回転ナズ、高台削り出し、外面に片状彫	試験、瀬戸窯産	
本調査	17	B-1	S E-19	編器	盆	6.0	(2.5)			20			紫	白色	良好	回転ナズ、外面に片状彫	試験、瀬戸窯産	
本調査	18	B-1	S E-19	陶器	盆	長さ	8.8、最大径	13.5		98			紫	暗褐色	良好	ナズ・唇押え	常楽堂	
本調査	19	B-1	S E-19	陶器	陶鉢	(4.0)	19.6			15			紫	淡褐色	良好	削り出し	外面試験、内面鉄轄ナズ形、瀬戸窯産	
本調査	20	B-1	S E-19	編器	鉢木製	28.6	12.5	22.2		45			紫	淡褐色	良好	回転ナズ、底縁回転ヘラナズ形	無験、瀬戸窯産	
本調査	21	B-1	S E-19	陶器	木製	28.2	5.9	23.4		60			紫	淡褐色	良好	回転ナズ、底縁未調査	無験、京産	
本調査	22	B-1	S E-19	土師器	短筒	35.4	8.8			60			紫	淡茶褐色	良好	口縁部コゴナ、内面ナズ、外面ヘラナズ形	外面に傷が付着	
本調査	23	B-1	S E-19	瓦	瓦	(4.8)	21.9			40			紫	淡灰色	良好	外面ナズ、内面ナズ・唇押え	外面に傷が付着	
本調査	24	B-1	S E-32	編器	碗	(4.6)	4.65			40			紫	淡白色	良好	回転ナズ、高台削り出し、外面に片状彫	試験、生焼	
本調査	25	B-1	S E-35	陶器	碗	30.6	(4.3)			5			紫	淡灰色	良好	回転ナズ、外面に片状彫	試験、京産・信楽系	
本調査	26	B-1	S E-36	全製品	小瓶	長さ	10.3、最大径	1.6、厚さ	0.7									
本調査	27	B-1	S E-48	編器	皿	8.35	4.4	3.2		50			紫	淡白色	良好	削りナズ、高台削り出し、外面に片状彫、口縁部一枚彫	透物、瀬戸窯産	
本調査	28	B-1	S E-2	土師器	皿	7.25	2.2			45			紫	淡褐色	良好	ナズ・唇押え	口縁部に傷が付着	
本調査	29	B-1	S E-2	土師器	皿	11.6	1.95	7.5		60			紫	淡褐色	良好	口縁部コゴナ、底縁内面ナズ、外面ナズ・唇押え	内面に傷が付着	
本調査	30	B-1	S E-2	土師器	皿	11.5	2.0	7.7		60			紫	淡褐色	良好	口縁部コゴナ、内面ナズ、外面ナズ・唇押え	口縁部に傷が付着	
本調査	31	B-1	S E-2	土師器	皿	11.5	2.5			70			紫	淡茶褐色	良好	内面ナズ、外面ナズ・唇押え	内面に傷、口縁部に傷が付着	
本調査	32	B-1	S E-2	土師器	鍋	31.0	(5.3)			5			紫	淡褐色	良好	内面ナズ	外面に傷が付着	
本調査	33	B-1	S E-2	土師器	鍋	30.8	(5.3)			20			紫	淡褐色	良好	内面ナズ	外面に傷が付着	
本調査	34	B-1	S E-63	木製品	箸板	竹の肌、厚さ	2.5-2.8											
本調査	35	B-1	S E-1	木製品	杵材	長さ	9.0、最大径	4.3、厚さ	0.8									
本調査	36	B-1	S E-2	木製品	杵材	長さ	14.8、最大径	1.0、厚さ	0.6									
本調査	37	B-1	S E-2	木製品	杵材	長さ	11.2、最大径	2.6、厚さ	0.4									

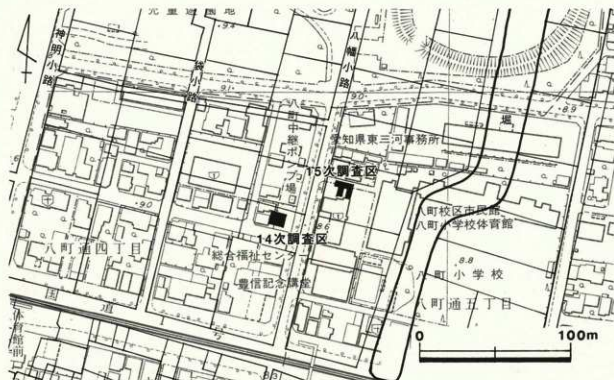
## 第5章 まとめ (第10図)

ここでは第14・15次調査について触れておきたい。

出土遺物から見た特徴として、第14次調査は磁器(染付)の量が比較的まとまっている点が指摘できる。これらは多くが18世紀代の肥前系で、瀬戸美濃窯産の製品はごく少ない。このような状況は第18次調査でも指摘されている。一方で他の出土遺物には19世紀代のものが見受けられることから、くらわんか碗のような大量生産品も出土しているが、鉢を中心とする他の磁器群は高級品であり、伝世したものと思われる。逆に第15次調査は磁器類が乏しく、むしろ陶器類の出土が卓越している。B-1区SK-19から出土した、まとまった量と内容の近世陶器群はその好例と言える。磁器出土量の違いは、屋敷地所有者の嗜好や家格の違いなどが、遺物に反映した結果と考えられる。

天保～嘉永ごろ(1830～52)の城内における屋敷地割を示した絵図「吉田藩土屋敷図」によれば、第14・15次調査の所在地は、前者が吉田藩士の北原徳三郎、後者が伊東道追の屋敷内に相当する。両屋敷は八幡小路を挟んだ南北にあり、八幡小路自体は現在も八町通四丁目と五丁目とを分ける通りとして名残を留めている。

ところで、第15次調査では古代～中世の遺構も確認された。今までに実施されてきた吉田城址の調査では、須恵器や灰釉陶器、中世陶器などが出土したほか、古代の竅穴住居や掘立柱建物なども確認されている。第14次調査ではわずかな中世陶器しか出土しなかったが、吉田城址付近には築城を遡る時代の遺構が広く展開していることが、改めて確認された。



第10図 藩士屋敷地と調査区の対照図(1/2,500)



# 第19次発掘調査





## 第19次調査

所在地 今橋町四番地

調査期間 平成13年9月20日～9月28日

調査面積 70㎡

調査理由 陸上競技場記録室新築工事

調査機関 豊橋市教育委員会

調査担当 岩瀬彰利（豊橋市美術博物館学芸員）

執筆 岩瀬彰利

## 目次

第1章 調査の経過	37
第2章 遺構	39
第3章 遺物	48
第4章 まとめ	55

## 挿図目次

第1図 第19次調査区位置図（1/2500）	38
第2図 第19次調査区全体図（1/80）	39
第3図 第19次調査遺構実測図-1（1/40）	41
第4図 第19次調査遺構実測図-2（1/60）	44
第5図 第19次調査遺構実測図-3（1/40）	47
第6図 第19次調査出土遺物実測図-1（1/3）	52
第7図 第19次調査出土遺物実測図-2（1/3）	53

## 表目次

第1表 第19次調査出土遺物観察表	54
-------------------	----

## 写真図版目次

図版7-1 調査区全景（北から）	2 調査区全景（南から）
8-1 道路（川毛通）全景（南東から）	2 道路（川毛通）全景（東から）
9-1 排水溝①（東から）	2 側溝と石抜き取り痕（東から）
3 排水溝①埋土（東から）	4 道路基盤に敷かれた小礫（東から）
10-1 道路（川毛通）土層断面（東から）	2 道路（川毛通）土層断面（南東から）
3 側溝の埋土（東から）	4 SK-1全景（東から）
5 SK-3全景（東から）	
11-1 SA-1・2全景（東から）	2 SA-2 P1（東から）
3 SA-1・2 P5・P6（南から）	4 SB-1・2（東から）
12 第19次調査出土遺物	

## 第1章 調査の経過

### 1. 調査に至る経過

吉田城址は、豊橋市教育委員会をはじめとして愛知県教育委員会や（財）愛知県埋蔵文化財センターによって、これまでに18次に及ぶ発掘調査が行われている。今回の発掘調査は、吉田城址の第19次調査に相当する。調査は、豊橋市陸上競技場の正面スタンド南側に記録室を新築するために行われた。調査に至るまでの経過は以下の通りである。

平成13年10月に豊橋市教育委員会スポーツ課から、陸上競技場内に記録室を平成13年度に建てる計画があり、建設予定地内に埋蔵文化財が存在するのかという照会があった。埋蔵文化財保護部門である美術博物館では、建設予定地が吉田城藩土屋敷地の一部に相当し、現地には構造物がないため遺構は良好に遺存しているものと判断し、建設前に発掘調査が必要である旨を回答した。平成13年度に陸上競技場記録室建設費が予算化されたため、美術博物館とスポーツ課との協議の結果、記録所建築部分とモニター支柱部分の合計70㎡について発掘調査を実施することで合意した。平成13年5月にスポーツ課より文化財保護法第57条の3「埋蔵文化財発掘の通知」が県教育委員会宛にあり、これを基に美術博物館では8月20日から吉田城址の発掘調査に着手した。

### 2. 調査の方法（第1図）

調査は、記録室建築予定地の13m×6m程度の範囲と狭かった（第1図）。集落址などの通常調査の場合、豊橋市教育委員会では10m四方のグリッドを設定して調査を行っているが、今回の調査区は狭かったため任意のグリッドを設定し、調査区内の国土座標については座標を後から示すという方法を行った。

調査区が陸上競技場のスタンドになっている関係で、基本層序は表土下約1mのところは歩兵第十八聯隊時代の旧地表面があり、その下約20cmぐらいのところ吉田城藩土屋敷時代の旧地表面が存在していた。地山面は黄褐色粘土層であり、遺構検出はその地山面で行っている。なお、作業順序は以下のとおりである。

1. 重機を使用して表土剥ぎを行う。
2. 調査区グリッドを設定し、国土座標に照合させる。
3. 人力で遺構検出・掘削を行い、遺物を取り上げる。
4. 必要に応じて遺物出土状況図などの関係図面を作成したり、遺構写真を撮影する。
5. 遺構を完掘させ、遺構全体図を完成させる。
6. 調査区内の清掃を行い、全体写真を撮影する。
7. 調査終了後、重機を使って調査区を埋め戻す。

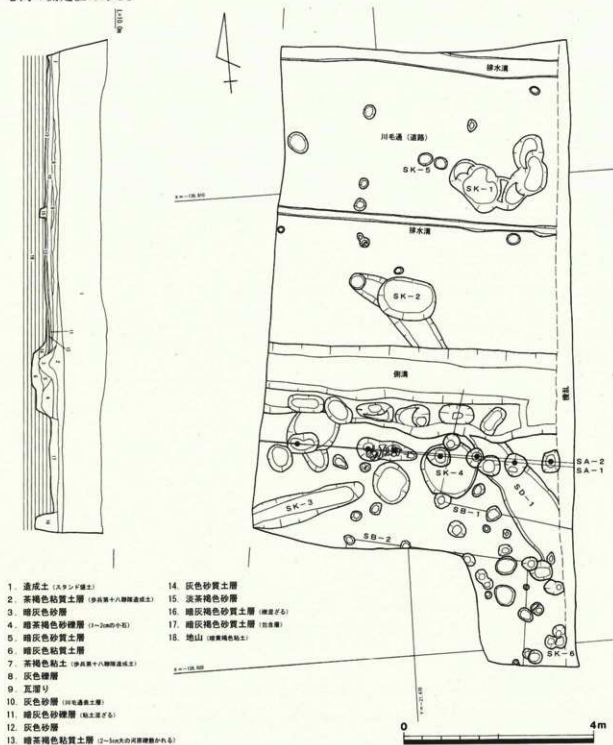
今回の調査では、表土剥ぎの段階で固く締まった砂礫層が確認された。当初は軍隊時代の攪乱層と  
 考えていたが、後に江戸時代の吉田城内川毛通であることが判明した。攪乱層と当初考えたため、川  
 手通砂利層の一部を表土剥ぎの段階で誤って削平している。昨年行った第18次調査では、倉垣源左衛  
 門邸の石垣・堀跡の西側境界を確認したが、今回の第19次調査では北側境界部分が調査区内で確認さ  
 れることが予想された。予想通り、調査区内から開溝と堀跡が検出されたが、石垣については石が抜  
 き取られている状況であった。また、歩兵第十八聯隊が練兵場に整備した際の整地層も見つかった。  
 古代～中世の遺構では道路部分から検出された土壌等がある。遺物では古代の灰釉陶器等が出土し  
 ているがその量は少ない。



第1図 第19次調査区位置図 (1/2,500)

## 第2章 遺構

遺構は、掘立柱建物（SB）2棟、道路1本、塀（SA）2列、溝（SD）1条、土壌多数等が検出されている。ここでは各遺構を種類ごとに説明し、土壌に関しては遺物を出土したもののみを記載する。なお、各遺構の規模等は検出面で測った数値であり、掘立柱建物、塀の規模計測値は柱穴の中心間の測定値である。



第2図 第19次調査区全体図（1/80）

## 1. 掘立柱建物 (第3図)

掘立柱建物は、側柱のものが2棟確認されている。この他に、柱痕跡のある柱穴や柱穴状の土壌が若干検出されている。

### SB-1 (第3図)

掘立柱部と側溝等で大半が確認できないが、1間以上×1間以上の掘立柱建物と考えた遺構で、主軸方位はN-14°-Eである。柱間はP1～P2が1.16m、P2～P3が1.20mを測る。

柱穴の規模及び埋土は、P1は平面形は楕円形で、最大径は36cm、深さは17cmで埋土は暗灰褐色砂質土である。P2は最大径36cmの楕円形で深さは38cm、埋土は暗灰褐色砂質土である。P3は円形で直径36cm、深さ23cmを測り、埋土は暗灰褐色砂質土である。各柱穴からは遺物は出土していないが、建物が推定される藩土屋敷地の範囲外に延びるため、建物の時期は江戸時代以前、おそらく中世のものと推測される。

### SB-2 (第3図)

3間×2間以上の掘立柱建物で、半分ぐらいは調査区外に延びている。主軸方位はN-80°-Wを測る。規模は、桁行3.92m、梁間2.20m以上をそれぞれ測り、柱間は桁行でP1～P2が1.20m、P2～P3が1.32m、P3～P4が1.34m、梁間でP4～P5が1.10m、P5～P6が0.84mとなる。

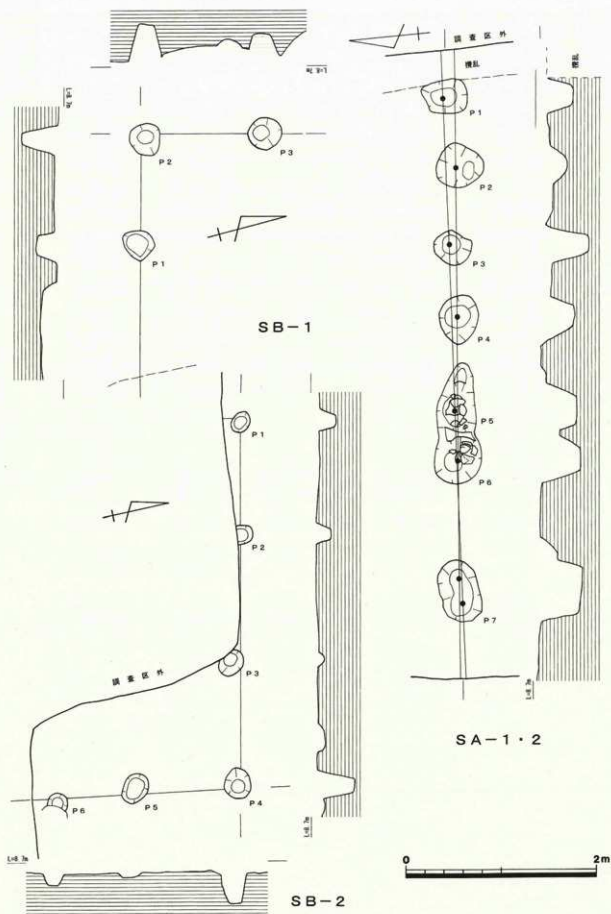
柱穴の規模及び埋土は、P1は平面形は楕円形で、最大径は24cm、深さは16cmで埋土は暗灰褐色砂質土である。P2は一部を調査区外に欠くが直径22cmの円形と思われ、深さは17cm、埋土は黒灰色砂質土である。P3も一部を調査区外に欠くが、平面形は楕円形と思われ、最大径30cm、深さ18cmを測り、埋土は暗灰褐色砂質土である。P4は最大径32cmの楕円形をなし、深さは32cmを測る。柱穴の埋土は、暗灰褐色砂質土である。P5は最大径34cmの楕円形をなし、深さは4cmを測る。柱穴の埋土は、淡茶褐色砂質土である。P6は一部を他の土壌で壊されているが、平面形は直径24cmの円形と思われ、深さは8cmを測る。柱穴の埋土は、暗灰褐色砂質土である。

各柱穴から出土した遺物には、P1から須恵器・坏蓋(第6図1)、P2は中世陶器・碗、P3は中世陶器・小皿、P4は中世陶器・碗(第6図2・3)、土師器・鍋と大半が細片で、中世以前のものばかりである。しかし、建物の主軸が吉田城の川毛通や屋敷敷地にほぼ合うため、建物の時期は江戸時代以後の藩土屋敷のものと考えたい。

## 2. 塀 (第3図)

吉田城藩土屋敷の塀がSA-1・2の2箇所で見ついている。この藩土屋敷は第18次調査で検出した幕末の吉田藩中老倉内源左衛門邸であり、屋敷の南側塀に相当する。倉垣邸は、敷地面積は990坪(約3,267㎡)と広大な屋敷である。SA-1とSA-2は柱の間隔が異なり、塀の建て替えのため重複している。これらの塀は第18次調査で確認した屋敷西側塀のSA-1、SA-2にそれぞれ対応し、





第3図 第19次遺構実測図-1 (1/40)

柱穴の切り合い関係からSA-1の方が古いことがわかっていて、SA-1とSA-2の柱穴については、明確に分離できなかった点もあり、ここでは両者の柱穴については通し番号で記述する。

#### SA-1 (第3図)

SA-1は調査区南側でSA-2と重複して検出され、3間以上で大半は調査区外に延びている。検出した柱穴は4基で、昨年検出された柱穴間の布掘り状の浅い溝は今回は検出されていない。SA-1の長さは4.6m以上、主軸方位はN-84°-Wを測る。柱間はP2~P4が1.58m、P4~P5が1.52m、P5~P6は1.62mを測る。

柱穴の規模及び埋土は、P2は最大径50cmの楕円形で、柱穴の深さは28cm、埋土は暗灰褐色砂質土である。P4は楕円形で最大径51cm、深さ40cmを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。P6はSA-2の柱穴と一部が重複しているが、本来は径56cmの楕円形であったものと思われ、柱穴の深さは41cmを測る。土壌内には柱を固定するためか8~15cm大の礫が6個入れられていた。埋土は暗灰褐色砂質土である。P7はSA-2の柱穴と一部が重複している柱穴であるが切り合い関係は不明である。本来は径42cmの円形で、深さ36cmの柱穴であったものと思われる。埋土は暗灰褐色砂質土である。

各柱穴からの出土遺物は、P6から中世陶器・碗、土師器・皿・鍋の細片が出土しているが、吉田城川毛通と主軸が合っているため藩土屋敷の塀と考えられ、柱穴内には古い遺物が混入したものと考える。よってSA-1は、戦国期の池田照政による城域整備以降のものと思われる。

#### SA-2 (第3図)

SA-2はSA-1を建て直したもので、3間以上で大半は調査区外に延びている。検出した柱穴は4基で、長さは5.1m以上、主軸方位はN-87°-Eを測る。柱間はP1~P3が1.56m、P3~P5が1.76m、P5~P7が1.80mを測る。

柱穴の規模及び埋土は、P1は平面形は隅丸方形で規模は最大径48cm、深さは26cmで埋土は暗灰褐色砂質土である。P3は他の土壌で一部を壊されているが、本来は径40cmの円形であったものと思われる。柱穴の深さは45cm、埋土は暗灰褐色砂質土である。P5はSA-1のP6と一部が重複しているが、最大径72cmの楕円形であったものと思われる。柱穴の深さは37cm、埋土は暗灰褐色砂質土である。柱穴内には柱を固定するためか7~18cm大の礫が7個入れられていた。このP5とSA-1・P6の柱穴のみ礫が入れられている。P7はSA-1の柱穴と重複するが、最大径41cmの円形と思われ、深さは45cmである。埋土は暗灰褐色砂質土である。

各柱穴からの出土遺物は、P5から須恵器・坏身(第6図4)の小破片が出土しているが、SA-1同様、この遺物は塀工事の際に柱穴に古い時代のものが混入したものと考える。SA-2は、池田照政の城域整備以降に建てられたSA-1の建て替えであることから、その帰属時期は江戸時代のものと思われる。

### 3. 道路（川毛通）（第4図）

調査区北側で見つかった道路で、吉田城内の主要道である川毛通と考えられる。検出された道路は南側にある吉田城藩士屋敷との敷地境付近で、道路内には排水溝と思われる溝が掘られ、敷地境には側溝が伴う。側溝は素掘りであるが屋敷側には石垣が築かれていたようで、石の抜き取り痕が確認されている。ここでは検出された道路について規模や構造を説明し、併せて付属施設についても述べる。

#### 道路（第4図）

長さ6.0m以上、幅6.6m以上の規模で検出され、主軸方向がN-84°-Wの道路である。絵図からすると直線的に延びる城内主要道の川毛通に相当する。道路の幅であるが、南端は側溝が検出でき確認できたが、北端は調査区外のため不明である。しかし、絵図などから幅は10mを越えるものと推測される。後述する道路内の排水溝のうち、幅広の排水溝②を中心に位置していたものと仮定すると、幅は約12mと大きな道路であったものと推定される。

道路の構造は、地山⑤（番号は土層図に対応）を10cmぐらい削平して平坦にし、その上に6cmの厚さに河原石（2～5cm大）を敷き詰めて暗茶褐色粘質土②で固めている。更にその上に細かく締まった灰色砂層⑨を10cmの厚さで敷き、川毛通の表面としている。ただ、道路端において暗茶褐色粘質土②と灰色砂層⑨の間に灰色砂層⑪と暗灰色砂礫層⑩が確認されている。このことから、当初は暗茶褐色粘質土②上に灰色砂層⑪を敷いて道路としていたが、改修を行い暗灰色砂礫層⑩を道路端部に敷いて整地し、その上に灰色砂層⑨を敷いて築造したことが伺える。

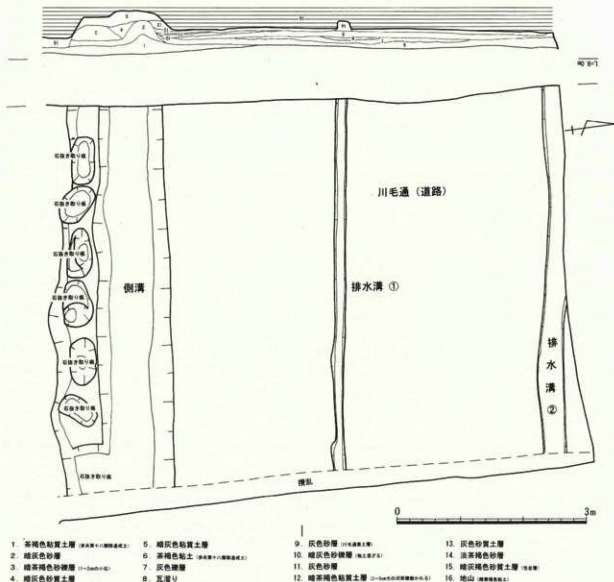
**排水溝：**道路内の地山面に2条の溝が検出されている。これらの溝は道路と主軸方向がほぼ一致している。このことから道路内に透した雨水排水のための暗渠的要素のある溝であると判断し、排水溝とした。排水溝①は、道路南端から2.7mの位置にある直線的に延びる断面形が箱形の溝で、規模は幅21cm、深さ11cmを測る。埋土は淡茶褐色砂層である。排水溝②は、道路南端から5.9mの位置にあるほぼ直線的に延びる溝で、断面形は箱形で規模は幅45cm、深さ6cmを測る。埋土は灰色砂層である。

**側溝：**道路南端で確認された側溝である。側溝の道路側は法面角度が約45°の素掘りで、屋敷側は石は抜き取られてはいたが、後述するが石垣が築かれていたようである。側溝の長さは6.4m以上、幅は1.9m、深さは45cmを測る。側溝は屋敷地側の深さ36cmのところ幅35cm程の平坦面があり、ここに石垣が築かれていた。この平坦面から10cm程の深さに溝底がある。溝底は平坦で幅は70cmである。屋敷地側に築かれた石垣を考慮すると、側溝は幅90cm程、深さは50cm程であったと思われる。ただ、側溝の埋土をみると溝底は埋まるのが早かったようで、溝底に堆積した暗灰色粘質土層⑤上にも約30cmの幅で道路舗装の砂層や砂礫層が及んでいる。側溝は明治になって歩兵第十八聯隊が造成を行っても一時期まで機能していたようで、埋まる直前の最終段階では、幅60cm、深さ40cm程に狭くなりながらも機能していたことが土層断面から伺える。側溝からの出土遺物には、陶器・鍋（第6図5）、土師器・皿（第6図6）などの19世紀代の土器が出土している。

**石垣：**石垣の石は既に抜き取られていたが、調査では石の抜き取り痕が検出されている。抜き取り

痕は長径70cm、短径45cm、深さ9cmぐらいの土壌が6基と長径80cm以上、短径66cm以上、深さ9cmの他に比べて大きな土壌1基が確認されている。これら抜き取り痕からは根石や裏込め石と思われる石も量は多くないが出土している。昨年度の第18次調査で確認された八幡小路側の石垣は、底面に約10cmの暗褐色砂礫を敷き、その上に約20～40cm大の石材を西側の目地を合わせて一列に並べていた。今回検出された石抜き取り痕から、使用石材は70cm前後の大きさと推定され、八幡小路側より主要道であった川毛通の石垣の方が大きな石材を用いていたものと思われる。そのために抜き取られて他に転用されたのであろう。石抜き取り痕からは、陶器・花瓶（第6図7）の15世紀中葉の土器が出土しているが、年代が古いため遺物は古いものが混入したものとする。

ところで、川毛通側の石垣が何段築かれていたかは石が残っていないのでわからない。ただ八幡小路側は調査で検出された石垣は全て一段のみで、更に石が上に積み重ねられていた箇所は無かった。しかし、裏込め石の方が石列より高い面で検出されていることから、江戸時代には2段以上石が積み重ねられていたものと考えられている。川毛通も石垣基底面から当時の地表面まで50cm程があり、江戸時代には2段以上石が積み重ねられていた可能性は高いものと思われる。



第4図 第19次調査遺構実測図-2 (1/60)

#### 4. 溝 (第5図)

溝は、1条が確認されているのみである。その他に川毛通に付随する側溝や排水溝があるが、これらは道路の項目で説明しているのので、第2章2を参照していただきたい。

##### SD-1 (第5図)

SD-1は、調査区の中央付近から始まり北西-南東方向にかけて直線的に延びている。溝の中央部は川毛通側溝で壊されている。

規模は、最小幅0.36m、最大幅1.06mと南東方向に広がり、長さは残存値で7.9mを測る。溝の断面形は皿状で、深さは最大で15cmを測る。北端と南端との溝底部の高低差は約8cmと北から南に向かって少しずつ低くなっている。埋土は、暗灰褐色砂質土である。出土した遺物は緑釉陶器・壺(第6図8)、須恵器・甕、中世陶器・碗、土師器がある。遺構の時期ははっきりしないが、おそらく中世のものであろう。

#### 5. 土壌 (第2・5図)

土壌は、調査区南側を中心に約70基が検出されている。ここでは、遺物が出土している土壌を中心に述べる。

##### SK-1 (第5図)

数基の土壌が重複しているような形状であるが、埋土の違いは無く前後関係はわからないため1基の土壌として扱った。幅56~96cmの土壌がC字状に並び、規模は長径2.1m、深さは最大26cmを測る。埋土は黒褐色砂質土で、土壌内から焼土や炭が出土している。出土遺物には灰釉陶器・壺(第6図9~12)や須恵器・甕(第6図13)、土師器・碗(第6図14)があり、土壌は9世紀中頃のものと思われる。

##### SK-2 (第5図)

SD-1を壊して掘り込まれている。平面形は長楕円形で、規模は長径で124cm、短径で90cmで、深さは20cmを測る。埋土は、暗灰褐色砂礫土である。出土した遺物には磁器・碗(第6図15)、陶器・鉢(第6図16)があり、土壌は19世紀中葉のものであろう。

##### SK-3 (第5図)

直線的に帯状に延びる土壌で西側は調査区外でわからない。規模は長さ224cm以上、幅50cmで、深さは32cmを測る。埋土は暗灰褐色砂質土であるが5~15cm大の礫が多く見られた。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SK-4 (第5図)

平面形は円形で、規模は径122cm、深さは18cmを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。遺物は無く時期は不明である。

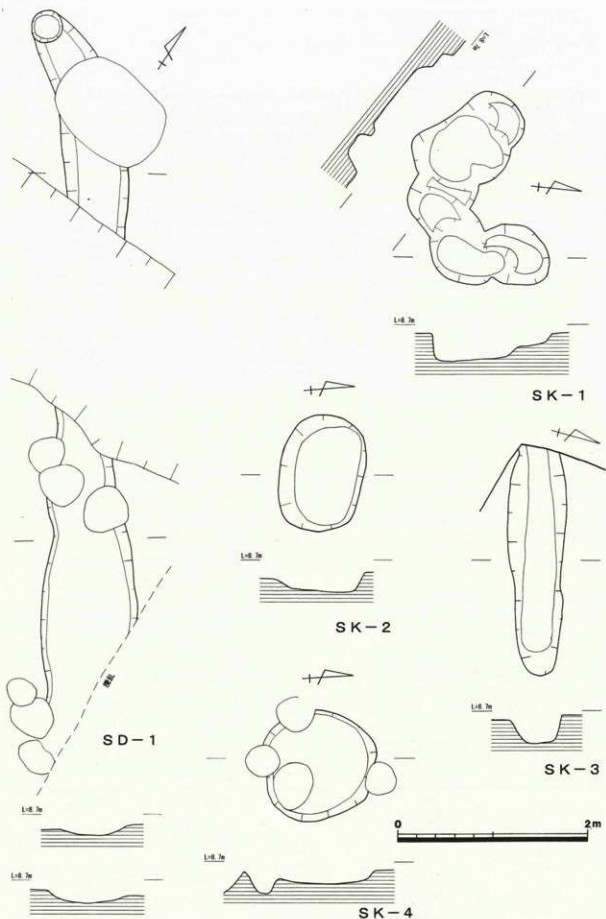
SK-5 (第2図)

平面形は楕円形で、規模は最大径32cm、深さは20cmを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には須恵器・坏蓋(第6図17)、平瓶(第6図18)等があり、帰属時期は8世紀前半頃と考えられる。

SK-6 (第2図)

3基の円形土壇が重複しているような形状であるが、切り合い関係はわかっていない。規模は最大径56cm、深さは33cmを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。出土遺物には土師器・鍋(第6図19)があり、帰属時期は12世紀中葉～15世紀中葉頃と考えられる。





第5図 第19次調査遺構実測図-3 (1/40)

## 第3章 遺物 (第6・7図、第1表)

今回の調査で出土した遺物には、須恵器・灰軸陶器・中世陶器・陶器・磁器・土師器・瓦・銭貨等があり、コンテナ箱(34×54×20cm)に1箱程度と極めて少ない。このうち、調査区が吉田藩藩土屋敷地であるため、近世の陶磁器の出土が主体を占めている。しかし、遺構出土の遺物は少なく、大半は表土から出土している状況である。ここでは、図示できる出土遺物を遺構毎に分け、掘立柱建物、橋、道路、溝、土壌、表土の順番で説明する。なお、遺物についての細かな調整・法量等は第1表の観察表に記した。

### SB-2・P1 (第6図1)

1は須恵器・坏蓋の口縁部破片である。口縁端部は下方に屈曲し丸くおさまられている。内外面は回転ナデで調整されている。9世紀代のものである。

### SB-2・P4 (第6図2・3)

2・3は中世陶器・碗である。2は口縁部破片で、口縁はやや内湾し、端部で僅かに外反する。調整は内外面回転ナデである。3は底部破片である。有高台の底部で、高台の断面形は台形を呈し、底面に刳殻痕がみられる。調整は内外面回転ナデで、底部は糸切り痕がある。13世紀中葉のものであろう。

### SA-2・P5 (第6図4)

4は須恵器・坏身の底部破片である。調整は内外面回転ナデで、底面は回転ヘラケズリである。8～9世紀代のものであろう。

### 道路・側溝 (第6図5・6)

5は陶器・鍋である。いわゆる行平鍋で、口縁部に把手が貼り付けられている。口縁部は緩やかに内湾し、端部で強く張り出し、内側に蓋受部が作られている。調整は内面回転ナデで、鉄軸が施されている。瀬戸美濃産の19世紀代のものである。6は土師器・皿である。体部と底部の境界は強く屈曲し、口縁部は外傾し端部は丸い。調整は内外面ナデである。近世のものか。

### 道路・石抜き取り痕 (第6図7)

7は陶器・花瓶、いわゆる尊式花瓶の底部破片と思われる。底部は底面に向けてラッパ状に広がる。調整は内外面回転ナデ、底面には糸切り痕が見られる。古瀬戸で15世紀中葉のものである。

### SD-1 (第6図8)

8は緑軸陶器・壺の底部である。体部は外方に開き底部は有高台で、高台の断面形は箱形に近い。調整は内外面回転ナデで、外面及び内面に緑軸が掛っている。10～11世紀代のもと思われる。

## SK-1 (第6図9~14)

9~12は灰軸陶器・壺である。9は壺の口縁部破片で、口縁部は外反し端部は面をもつ。調整は内外面回転ナデである。10は壺の頸部で、頸部から体部へは屈曲し強く張り出している。調整は内外面回転ナデである。灰軸が掛る。11は壺の体部で、底部に向けて直線的に窄まっている。調整は内外面回転ナデである。12は壺の底部である。体部は外方に開き底部は有高台で、高台の断面形は箱形に近い。調整は内外面回転ナデである。9~12の破片は細片のため同一個体かどうかはわからない。しかし、全体形の特徴をまとめると違和感がなく、これらは9世紀中頃のものと思われる。13は須恵器・甕の体部破片である。外面にはタキメ、内面はナデ調整がされている。古代のものである。14は土師器・碗の底部である。底面は平坦な無高台のもので糸切り痕が認められる。時期は不明であるが古代~中世にかけてのものと思われる。

## SK-2 (第6図15・16)

15は磁器・碗、いわゆる端反碗である。口縁部はやや外反し、体部はやや丸みをもち底部に細い高台が付く。瀬戸美濃産の染付で、調整は内外面回転ナデである。19世紀中葉のものである。16は陶器・鉢である。体部はやや内傾し口縁部で僅かに外傾する。端部は僅かに肥厚されやや面をもつ。体部から底部にかけては内屈し、底部は無高台の平底である。調整は内外面回転ナデで、全体に柿釉が掛かる。江戸時代後期の京信系のものである。

## SK-5 (第6図17・18)

17は須恵器・杯蓋の口縁部破片である。口縁部は曲線を描き口縁端部は下方に緩く折り曲げてある。内外面は回転ナデで調整されている。8世紀前半のものである。18は須恵器・平瓶の体部破片である。体部上面は直線状に肩部で屈折する。調整は内外面回転ナデである。古代のものである。

## SK-6 (第6図19)

19は土師器・鍋である。いわゆる伊勢型鍋で口縁部は強く外反し、端部は折り返して肥厚している。調整は内外面ナデである。12世紀中葉~15世紀中葉のものであろうか。

## 表土 (第6図20~第7図)

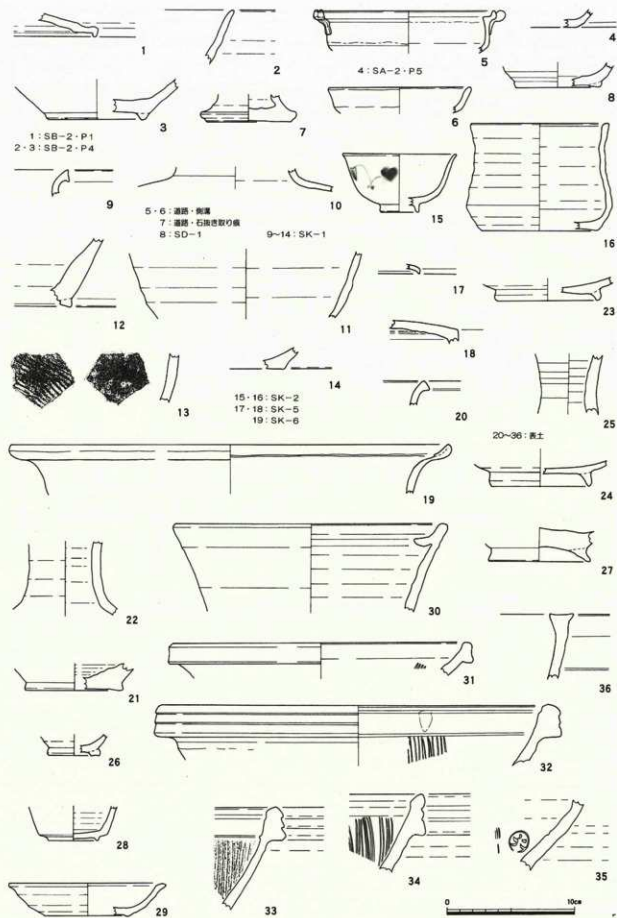
20・21は須恵器・壺である。20は壺の口縁部破片で、口縁部は外反し端部は斜方向に面をもつ。調整は内外面回転ナデである。8世紀代のものである。21は壺の底部である。無高台の底部であるが底には細い緑帯が貼り付けられている。調整は内外面回転ナデで、底面は未調整と思われる。古代のものと考えられる。22は須恵器・高坏の脚部破片である。脚部は底面にかけてラッパ状に広がり、調整は内外面回転ナデである。7~9世紀代のものであろう。23・24は灰軸陶器・碗の底部破片である。23は体部は外方に開き底部は有高台で、高台の断面形は三日月形に近い。調整は内外面回転ナデで、底面は糸切り痕が認められる。10世紀後半のものである。24も体部は外方に開き底部は有高台で、高台は細く真っ直ぐに延びている。調整は内外面回転ナデで、底面は糸切り痕が認められる。10世紀中

業〜11世紀前業のものである。25は灰軸陶器・壺の頸部である。調整は内外面回転ナデである。9〜10世紀代のもと思われる。26は灰軸陶器・小壺の底部である。有高台の底部で、高台の断面形は箱形に近い。調整は内外面回転ナデで、底面は糸切り痕が認められる。9〜10世紀代のもと思われる。27は中世陶器・碗の底部破片である。有高台の底部で、高台は外方に広がり端部は細く丸い。調整は内外面回転ナデで、底面は糸切り痕が認められる。12世紀中業のものである。28は陶器・碗である。体部は外傾し底部で強く屈折する。底部には削り出し細い高台がある。調整は内外面回転ナデである。19世紀代のものか。29・44は陶器・皿である。口縁部は外反し端部は丸く、底部は低い削り出し高台である。調整は内外面回転ナデで、全体に長石釉が掛る。17世紀前業の志野丸皿である。30は陶器・水甕である。口縁部は僅かに外反し、内面に張り出しが見られる。調整は内外面回転ナデで灰釉が掛る。瀬戸産で19世紀中業のもと思われる。31〜35は陶器・摺鉢である。31は口縁部破片で、口縁部は八字状に大きく開き、端部は肥厚して外側に緑帯を有す。調整は内外面回転ナデで、全体に錆釉が施されている。瀬戸産で、16世紀末業のものである。32〜34は口縁部破片で、口縁部は八字状に大きく開き、端部は肥厚して外側に緑帯を有す。緑帯部には2条の沈線が巡らされている。調整は内外面回転ナデで、全体に鉄釉が施されている。19世紀代の備前系であるが、34は少し古い。35は体部破片で、内面に押印文が見られる。瀬戸産で19世紀前業のもと思われる。36は陶器・甕、いわゆる半胴甕の口縁部破片である。口縁端部は肥厚され撫で窪められている。調整は内外面回転ナデである。18世紀代の瀬戸・赤津産である。37〜39は磁器・碗である。37〜39は底部破片で、体部はやや内湾し、底部には削り出された細い高台がある。調整は内外面回転ナデ、肥前産の染付で、19世紀代のものである。40は陶器・碗である。妬器質のもので底部を欠損している。口縁部、体部は直立し、底部との境界は強く屈折している。調整は内外面回転ナデで、19世紀前業の美濃産の染付である。41・42は磁器・蓋である。41は肥前産の染付で、端反碗の蓋であるが頂部の摘みを欠いている。口縁部はやや内湾し、内面に染付がみられる。調整は内外面回転ナデである。19世紀前業のものである。42は肥前産の染付で、広東碗の蓋であるが口縁部を欠いている。頂部には環状の摘みが付き、内外面回転ナデの調整がされている。18世紀後半〜19世紀前業のものである。43・45〜47は磁器・皿である。43は口縁部が外反し、端部は丸く収められている。調整は内外面回転ナデである。瀬戸美濃産で19世紀中業のものであろう。45は体部と底部の境界は強く屈曲し、口縁部は外傾し端部は丸い。底部には幅広い削り出し高台がみられる。調整は内外面回転ナデである。19世紀代の肥前産の染付である。46は底部破片で、体部はやや内湾し、底部には削り出された短い高台がある。調整は内外面回転ナデ、肥前産の染付で、19世紀代のものである。47は口縁部が波状のいわゆる花卉状を呈すもので、底部には丈高の削り出し高台がみられる。調整は内外面回転ナデである。19世紀代の肥前産の染付である。48は磁器・鉢である。口縁の形態は六角形を呈し、底部には削り出し高台がみられる。調整は内外面回転ナデである。19世紀代の肥前産の染付である。49・50は蓋物である。49の口縁部、体部は直立し、底部との境界は強く屈折している。底部に小さな削り出し高台がみられる。調整は内外面回転ナデで、19世紀代の肥前産の染付である。50も口縁部、体部は直立し、底部との境界は強く屈折するが、底部には高台はみられない。調整は内外面回転ナデ、底部は回転ヘラケズリである。19世紀代の肥前産の染付である。51は磁器・小瓶である。口縁部を欠損するが体部は扁平な球状を呈し、底部には削り出し高台がみられる。調整は内外面回転

ナデである。19世紀代の肥前産の染付と思われる。52は磁器・蓋物と思われるものである。蓋はなく、身は立ち上がりが高く斜め方向に直線的に延び、端部は尖る。肩部は張り出し体部は強く窄まるが底部は欠損している。調整は内外面回転ナデである。19世紀代の肥前産の染付と思われる。53は磁器・植木鉢である。口縁端部を屈曲させて幅広の面を作っている。底部は欠損している。調整は内外面とも回転ナデである。瀬戸産の染付で、19世紀前～中葉のものである。54は土師器・皿で、口縁部は外傾し端部はやや面を持つ。調整は内外面ナデである。近世のものと思われる。55・56は土師器・鍋である。55はいわゆる内湾形内耳鍋の口縁部破片で、端部を肥厚させナデ窪めている。調整は外面指押さえ、内面板ナデである。16世紀～19世紀のものと思われる。56はいわゆる伊勢型鍋で口縁部は強く外反し、端部は折り返して肥厚している。調整は内外面ナデである。12世紀中葉～15世紀中葉のものであろうか。57は軒平瓦である。瓦当端部の破片で、複線で唐草文が描かれている。近世のものである。58は軒丸瓦であり、瓦当面の中心に三ツ巴文を置き周りに珠文を巡らす。近世のものである。59は棟瓦の装飾部分の破片であり、立体的に雲形を表している。近世のものである。60は陶丸である。直径2cmの球状につくられている。時期不明だがおそらく中世のものと思われる。61は銭貨である。近世の寛永通寶である。

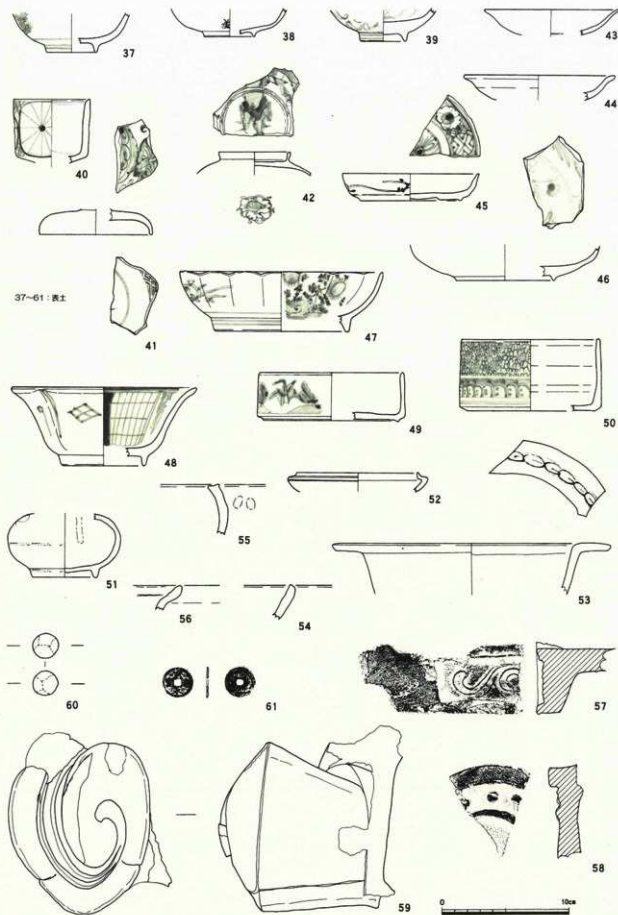
## 参考文献

- 藤澤貞祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター  
 赤塚次郎編 1996 「鍋と甕そのデザイン」第4回東海考古学フォーラム  
 瀬戸市教育委員会 1990 『尾呂』



第6図 第19次調査出土遺物実測図一(1/3)





第7図 第19次調査出土遺物実測図-2 (1/3)

第1表 第19次調査出土遺物観察表

番号	遺構	器種・分類	法量 (cm)			口径	胎土	焼成	色調	調整	備考
			口径	器高	底径						
6-1	SB-2-P1	S 环蓋					密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
2	SB-2-P4	P 碗					密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
3	SB-2-P4	P 碗	(3.2)		8.0		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部糸切り、高台部に粉雲母	
4	SB-2-P5	S 环蓋					密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	
5	道路・側溝	T 鉢	14.0	(3.3)			密	良好	黒褐色	内外面回転ナデ	鉄軸、瀬戸産
6	道路・側溝	H 皿	11.3	(2.1)			密	良好	淡褐色	内外面ナデ	
7	器・磁器類	T 花瓶	(2.2)		4.3		密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、底部糸切り	
8	S D-1	K 壺	(2.0)		3.4		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部ナデ	緑釉陶器
9	S K-1	K 壺					密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
10	S K-1	K 壺					密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
11	S K-1	K 壺					密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
12	S K-1	K 壺					密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
13	S K-1	S 壺					密	良好	黒褐色	内面ナデ、外面タタキメ	
14	S K-1	H 碗					密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、底部糸切り	
15	S K-2	Z 碗	9.0	4.6	3.2		密	良好	白色	内外面回転ナデ、染付	
16	S K-2	T 鉢	11.0	8.5	9.0		密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ	鉄軸
17	S K-5	S 环蓋					密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
18	S K-5	S 平瓶					密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
19	S K-6	H 鉢	35.0	(3.9)			密	良好	淡褐色	内外面ナデ	
20	表土	S 壺					密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
21	表土	S 壺	(2.1)		3.9		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
22	表土	S 高坏					密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
23	表土	K 碗	(1.8)		8.0		密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、底部糸切り	
24	表土	K 碗	(2.0)		7.8		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部糸切り	
25	表土	K 壺					密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
26	表土	K 小壺	(1.7)		4.0		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部糸切り	
27	表土	P 碗	(2.4)		8.0		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部糸切り	
28	表土	T 碗	(2.8)		3.8		密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、削り出し高台	
29	表土	T 皿	12.4	2.9	6.6		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、削り出し高台	
30	表土	T 水甕	21.2	(6.9)			密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ	鉄軸
31	表土	T 摺鉢	24.0	(2.7)			密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ	鉄軸
32	表土	T 摺鉢	30.6	(4.8)			密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ	鉄軸
33	表土	T 摺鉢					密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ	鉄軸
34	表土	T 摺鉢					密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ	鉄軸
35	表土	T 摺鉢					密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ、押印文あり	鉄軸
36	表土	T 壺					密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ	鉄軸
7-37	表土	Z 碗	(3.1)		3.9		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、削り出し高台、染付	
38	表土	Z 碗	(2.2)		4.0		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、削り出し高台、染付	
39	表土	Z 碗	(2.3)		1.8		密	良好	青白色	内外面回転ナデ、削り出し高台、染付	
40	表土	T 碗	6.0	(5.0)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、削り出し高台、染付	
41	表土	Z 蓋	8.8	(2.0)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
42	表土	Z 蓋	(1.8)		5.6		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
43	表土	Z 皿	10.0	(2.0)			密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ	
44	表土	Z 皿	12.0	(2.0)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
45	表土	Z 皿	10.8	2.1			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、削り出し高台、染付	
46	表土	Z 皿	(2.8)		7.8		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、削り出し高台、染付	
47	表土	Z 皿	16.0	4.7	5.4		密	良好	青白色	内外面回転ナデ、削り出し高台、染付	
48	表土	Z 鉢	14.6	6.2	3.3		密	良好	青灰色	内外面回転ナデ、削り出し高台、染付	
49	表土	Z 蓋物	11.4	3.8	4.7		密	良好	青白色	内外面回転ナデ、削り出し高台、染付	
50	表土	Z 蓋物	10.8	5.6	10.0		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラ削り、染付	
51	表土	Z 小瓶	(5.0)		5.0		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、削り出し高台、染付	
52	表土	Z 蓋物	9.4	(1.5)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、染付	
53	表土	Z 柿木鉢	22.0	(4.0)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
54	表土	H 皿					密	良好	淡褐色	内外面ナデ	
55	表土	H 鉢					密	良好	淡褐色	内面板ナデ、外面指押さえ、煤付着	
56	表土	H 鉢					密	良好	淡褐色	内外面ナデ	
57	表土	N 軒平瓦					密	良好	黒灰色	ナデ、唐草文	
58	表土	N 軒丸瓦					密	良好	黒灰色	ナデ、巴文、珠文	
59	表土	N 棟瓦					密	良好	黒灰色	ナデ、雲形文	
60	表土	T 陶丸					密	良好	淡褐色	ナデ	
61	表土	I 銭貨	径1.9、厚さ0.1、重さ3.1g							寛永通寶	

※S-須恵器 K-灰軸陶器 P-中世陶器 T-陶器 Z-磁器 H-土師器 D-土製品 N-瓦 I-鉄製品

法量の単位はcm、( )は残存数値。底径には、脚部径や台部径を含む。

## 第4章 まとめ

今回の調査は第19次調査に相当し、吉田城内の藩士屋敷地に相当する箇所を調査した。調査では、吉田城の主要道である川毛通や藩士屋敷地塀、建物などが検出されたほか、築城以前の遺構や遺物も出土している。ここでは、検出された遺構や遺物を、吉田城（今橋城）築城以前、築城以後、廃城後の3期に分けて検討し、調査の概要をまとめる。

### 【吉田城築城以前】

過去に行った吉田城の発掘調査によって、掘り方が方形の総柱建物や溝、古代の遺物が出土している。このことから、古代に官衙的な施設または集落が周辺に存在していたことが考えられている。今回の調査では古代の遺構には、明確なものではSK-1とSK-5があげられる。このうち9世紀中頃のSK-1は、土壌がC字状に並ぶ特異な形態をしている。性格は不明だが、内部より焼土や炭が出ていることから、鍛冶関係の遺構である可能性も考えられる。

古代以降も集落が営まれていたようで、建物（SB-1）や溝（SD-1）が検出されている。道路内より検出された土壌も大半は築城以前のもと考えられる。

出土遺物では、須臾器・坏身・坏蓋・平瓶・壺・甕、灰釉陶器・碗・壺、中世陶器・碗・小皿、土師器・碗などがある。量は少ないながら、古代から中世にかけて継続して遺物が出土している。

### 【吉田城築城以後】

吉田城は当初今橋城と呼ばれ、1505年に築城されているが、調査地が城内に組み込まれたのは天正18（1590）年に吉田城に入城した池田照政時代の城域拡張の際と思われる。今回の調査では、今橋城時代の明確な遺構は確認されていないが、近世吉田城では道路、藩士屋敷の塀、建物址が確認されている。調査地は、幕末では吉田藩の中老という要職で石高230石の倉垣源左衛門邸と城内の主要道である川毛通に相当する。倉垣邸は、川毛通と八幡小路の交差する南東角地に位置し、南北約65m、東西約45m、面積990坪（約3,267㎡）の大きな邸宅である。昨年行った第18次調査では屋敷の西側の塀、八幡小路との境界の石垣が確認されている。今回検出されたのは屋敷の北側の塀、建物と主要道の川毛通である。江戸時代に描かれた絵図によると、倉垣邸の表門は屋敷の北側、川毛通に面していたようである。屋敷北側の石垣は廃城時に取り除かれていたが、石抜き取り痕から推定すると八幡小路側よりも大型の石材が用いられており、表を意識したつくりになっている。明確な表門遺構は見つからないが、東端の石抜き取り痕のみ規模が大きく、そこが絵図面によると屋敷北側の中心付近に位置する。このことから、表門は調査区東端辺りにあった可能性が考えられる。

塀については、SA-1・2の2列が見つかっており、最低2回の建て替えが行われていた。このうちSA-1・2は推定する石垣端より内側に1.2mの同じ位置に重複して検出され、切り合い関係からSA-1の方が古いことが分かっている。18次調査同様、SA-1とSA-2は柱穴の間隔が異なっており、当初の塀は約1.5m間隔で柱が建てられていたが、後の建て替えにより約1.8m間隔で柱が建つように変更されている。ただ、今回は第18次調査で検出できたSA-3に対応するような塀は見つからない。

次に川毛通だが、調査によって道路の構造がわかったのは大きな成果である。道路は、地山を削平して平坦にし、その上に河原石（2～5cm大）を敷き詰めて暗茶褐色粘質土で固め、更にその上に細かく締まった灰色砂層を敷いている。また、道路内の地山面には透水した雨水排水のための暗渠的要素のある溝を入れていたようである。また、道路両側には側溝があり、道路側は予想外に素掘りで、屋敷側は石垣が築かれていた。川毛通の幅であるが、絵図などから幅は10mを越えるものと推測される。調査では両端が検出できていないが、道路内につくられた排水溝②を中心に位置していたものと仮定すると、幅は約12mと主要道として十分に大きな道路であったものと推定される。

出土遺物には、陶器・碗・皿・鉢、磁器・碗・皿、瓦などがある。倉垣邸を調査した第18次調査では、磁器の割合が高く全体の44.95%を占め、磁器の産地も肥前が85.72%も占めるという結果であった。今回の調査でも、遺物量は少ないが出土した陶磁器では磁器の割合が高く、産地も肥前産が多いという結果を得ている。

#### 【吉田城廃城以後】

廃城以後の遺構には、SK-2の廃棄土壌があり、道路側溝もしばらくは機能していたようである。SK-2は川毛通に掘り込まれた小型の廃棄土壌で、土壌内からは瓦礫や19世紀代の磁器等が出ている。道路側溝も藩土屋敷取り壊し後も機能していたことが土層断面から判明している。調査地は明治18年に豊橋歩兵第十八聯隊が誕生すると練兵場という広場として使われた。このため、廃棄土壌や側溝などは廃城から歩兵第十八聯隊練兵場整備の間のものと考えられる。歩兵第十八聯隊の遺構は練兵場として整地された層が確認されているのみである。



## 立会調査



## 立会調査

豊城中学地点（平成4年8月5日調査）

市民プール排水管地点（平成13年5月1日～7日調査）

本丸南側石垣地点（平成11年8月17日調査）

執筆 岩原 剛（豊橋市美術博物館学芸員）

## 目次

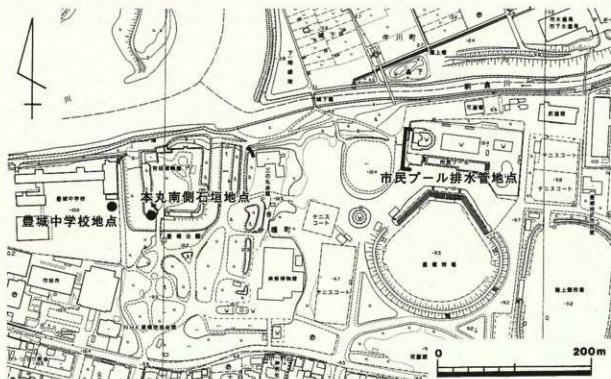
第1章 豊城中学校地点	59
第2章 市民プール排水管地点	61
第3章 本丸南側石垣地点	62

## 挿図目次

第1図 立会調査地位置図（1/5,000）	58
第2図 豊城中学校地点位置図（1/100）	60
第3図 石組み井戸実測図（1/40）	60
第4図 市民プール排水管地点出土遺物実測図（1/3）	61
第5図 本丸南側石垣地点略測図（1/40）	62
第6図 本丸南側石垣地点出土遺物実測図（1/3）	63

## 表目次

第1表 市民プール排水管地点出土遺物観察表	61
第2表 本丸南側石垣地点出土遺物観察表	63



第1図 立会調査地位置図（1/5,000）



## 第1章 豊城中学校地点 (第2・3図、写真1・2)

### 1. 立会地点の概要 (第2図)

豊橋市立豊城中学校は吉田城址内にあり、本丸の西側に位置する。学校の敷地は二の丸・三の丸にまたがっており、平成3年には、校舎の建設に先立って発掘調査が行われている。立会地点は、プール棟の南東側、学校の東門近くに当たる。ここは近世吉田城の二の丸に相当する。

### 2. 立会に至る経緯

平成4年8月5日、豊城中学校のグラウンド内の整地作業中に、地表からごく浅いところで石組みの井戸が現れたとの連絡を、豊橋市教育委員会学校教育課から受けた。現地へ赴いたところ、すでに井戸は開口しており、工事業者によれば、井戸の上面は蓋がされていたという。

若干の清掃作業により石組みの上面がほぼ検出されたため、実測図を作成した。なお、立会調査後、井戸は再び蓋をして、埋め戻された。

### 3. 遺構の状況 (第3図、写真1・2)

石組み井戸は、内径2.1mを測る大型のものである。石材は15～65cm程度のもを使用し、小口を内面に向けて積んでいる。石材はほとんどがチャートで、隙間には河原石が詰められている。ほぼ垂直に積まれているようだが、中間付近は20～30cmほど壁面が外側に張り出している。深さは、石組み上面から約7.6mを測る。目視できる限りで石組みが確認できることから、恐らく石組みは井戸の最下部近くまで存在すると思われる。なお、底は20cmほど耐水していた。また井戸の周囲には堀方が認められ、平面形は不整形だが、恐らく直径4.2m程度の円形を呈すると思われる。

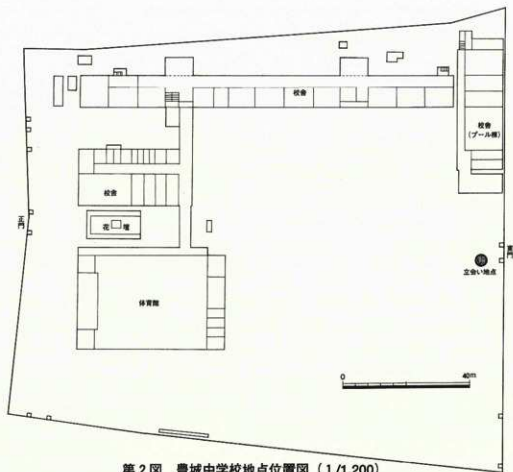
今回はあくまで遺存状況の確認のみにとどまり、遺物は採集していない。従って井戸の帰属時期は不明だが、吉田城の廃城後、明治期に設置された歩兵第十八聯隊の遺構には、レンガの使用が多く見られることから、近世以前の遺構と考えられる。さらに、本丸試掘調査でも近世と考えられる同様の石組み井戸が検出されていることから、恐らく近世の二の丸に設けられた井戸だろう。



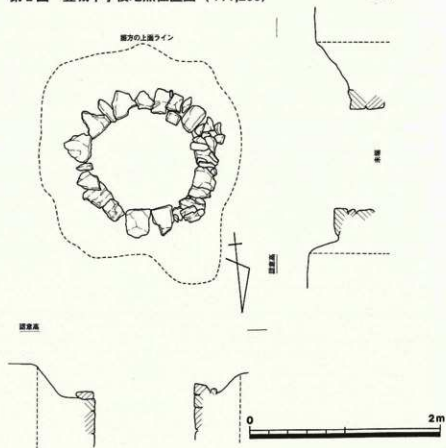
写真1 石組み井戸-1 (東から)



写真2 石組み井戸-2 (西から)



第2図 豊城中学校校地点位置図 (1/1,200)



第3図 石組み井戸実測図 (1/40)

## 第2章 市民プール排水管地点 (第4図、写真3、第1表)

### 1. 立会地点の概要

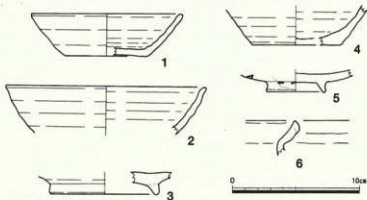
市民プールは豊橋公園の北端にあり、三の丸の東側に位置する。立会地点は市民プールの敷地の西側に沿って設けられた排水管部分であり、この付近は近世に鮑海神戸神明社（現豊橋市八町通三丁目所在）の旧社地が存在したところである。

### 2. 立会に至る経緯

豊橋市教育委員会スポーツ課から、排水管埋設に伴う埋蔵文化財発掘の通知（法57条の3）が提出され、平成13年5月1日～7日までの期間で工事が行われた。工事は重機で幅1m、深さ1.1～1.2mほど掘り下げ、順次排水管を埋設していくものである。豊橋市教育委員会では期間中立会を実施し、遺構・遺物の確認につとめた。厚さ0.3～0.5cmの表土の下には厚さ0.5～0.7mの黒灰色土があり、遺構は確認できなかったが、各時期の遺物が黒灰色土から出土した。

### 3. 出土遺物 (第4図、写真3、第1表)

採集された遺物は小片が多く、図化可能なものだけを示している。1は須恵器の坏で、底部には回転糸切り痕が見られる。2・3は中世陶器の碗で、3は底部に回転糸切り痕が見られ、高台は比較的高い。4・5は陶器の壺で、いずれも瀬戸美濃窯産と思われる。4は底部に回転糸切り痕が見られ、5は内面が無釉、外面には銅緑釉が流し掛けられ、また一部に鉄絵も見られる。6は土師器の鍋で、いわゆるくの字状口縁鍋である。1～3は吉田城築城を遡るもの、6は恐らく戦国期吉田城に、4・5は近世吉田城に伴うものであろう。これらの調整や法量等は第1表に示した。



第4図 市民プール排水管地点出土遺物実測図(1/3)

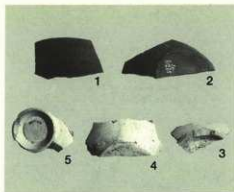


写真3 出土遺物

第1表 市民プール排水管地点出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量 (cm)			残存率%	胎土	色調	焼成	調整	備考
			口径	器高	底径						
1	須恵器	坏	11.9	3.3	6.4	20	密	淡褐色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	
2	中世陶器	碗	15.8	(3.7)		10	密	暗灰褐色	良好	回転ナデ	
3	中世陶器	碗		(1.7)	8.4	5	密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り・貼付け高台	
4	陶器	坏		(3.1)	7.0	10	密	淡褐色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り	
5	陶器	碗		(1.8)	4.5	15	密	淡褐色	良好	回転ナデ、内面無釉、外面鉄絵、貼付け高台、高台端部露胎	灰釉・銅緑釉
6	土師器	鍋		(2.8)			密	淡褐色	良好	ヨコナデ	

### 第3章 本丸南側石垣地点 (第5・6図、第2表)

#### 1. 立会地点の概要

近世城郭の吉田城には石垣が設けられている。すべての堀や槽に設置されたわけではないが、本丸ではほぼ全面的に認められる。

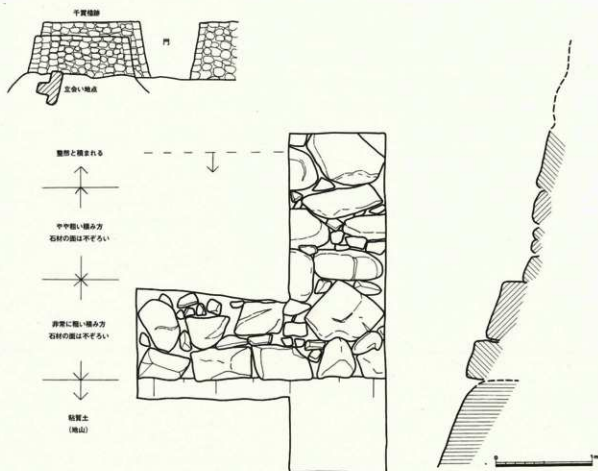
立会地点は、この本丸の南側石垣の下端付近に相当する。この石垣は、近世に千貫槽が設けられた土塁に施されたものである。

#### 2. 立会に至る経緯

平成11年8月、豊橋を通過した台風によって、本丸南側石垣上を覆う流出土に生えていた大樹が倒壊した。その撤去に際し、立会を実施した。実施日は平成11年8月17日である。

樹木を撤去したところ、普段は流出土に覆われて隠れていた石垣の下端が現れたため、簡単な流出土の除去作業を行い、略測図の作成及び写真撮影を行った。

樹木の撤去後、現地は新たに土を入れて埋め戻した。



第5図 本丸南側石垣地点略測図 (1/40)

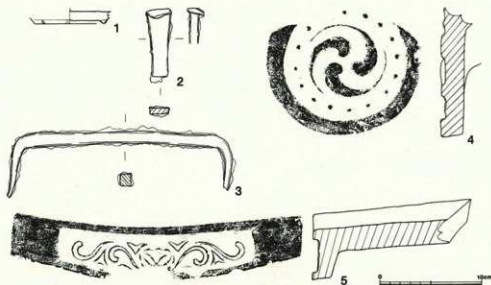
### 3. 遺構の状況 (第5図)

略測図に示した石垣は、本来流出土によって隠れている部分である。現状で見ることが出来る石垣(近世初期に遡る可能性を持つ鉄柵下の石垣を除く)がほぼ同大の石材を使用し、表面をそろえて整然と石材が積まれているのに対し、ここでは表面が著しく凹凸し、石材の間に隙間が目立つなど、粗雑な印象を受ける。さらに詳細に見ると、検出された石垣の下二段は特に隙間が目立ち、石材は著しく外へ飛び出すなど、積み方が粗く感じられる。石垣に使用されている石材はすべて花崗岩であり、ほかと同様近世に築かれたものであることはほぼ間違いないと思われる。なお石垣は粘質土の上に直接積まれていて、立会時には刷木は見受けられなかった。

このように、石垣の積み方が著しく異なる状況については、最下段付近のみ工法上の都合から意図的にそうしたのか、あるいは石垣の積み直しの結果と考えた方がよい。例えば宝永4年(1707)にあった宝永の地震では、千貫槽やそれに連なる土塀が倒壊するなど吉田城内に大きな被害が出ており、積み直された可能性も捨てきれないだろう。

### 4. 出土遺物 (第6図、第2表)

遺物はいずれも流出土から出土した。1は中世陶器の碗で、底部は回転糸切りの後にナダられ、高台は著しく低い。2・3は鉄製品で、2は楔、3は鏝である。2は頭が潰れ折り曲げられている。4・5は瓦である。4は軒丸瓦で、三巴文は右巻きで太く、周囲には細かく密な珠文が見られる。5は軒平瓦で、中心飾りは先の開いた花文様であり、左右に2反転した唐草文を配する。また文様はすべて複線で表現されている。以上の調整・法量等は第2表に示した。



第6図 本丸南側石垣地点出土遺物 (1/3)

第2表 本丸南側石垣地点出土遺物観察表

番号	出土場所	種類	器種	法量 (cm)	残存率%	胎土	色調	焼成	調整
1	流出土	中世陶器	碗	器高(1.3)、底径6.8	20	密	淡灰色	良好	回転ナデ、底部回転糸切り、高台貼り付け後ナデ
2	流出土	金属製品	くさび	長さ22.0、太さ1.2	95				
3	流出土	金属製品	かすがい	長さ7.3、幅2.35、厚さ0.6	100				
4	流出土	瓦	軒丸瓦	径15.0、内径11.9	20	密	淡灰色	良好	端部ヨコナデ、真当裏面ナデ
5	流出土	瓦	軒平瓦	幅28.5、内区幅19.5	50	密	淡灰色	良好	端部ヨコナデ、真当裏面ナデ

## 報告書抄録

ふりがな		よしだじょうし (こ)						
書名		吉田城址 (V)						
副書名								
巻次								
シリーズ名		豊橋市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号		第63集						
編著者名		岩瀬彰利・岩原剛						
編集機関		豊橋市教育委員会						
所在地		〒440-0801 愛知県豊橋市今橋町3番地の1 豊橋市美術博物館 TEL 0532-51-2879						
発行年		西暦2002年3月22日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇.〇	東緯 〇.〇	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よしだじょうし 吉田城址	とよはししゅうし 豊橋市今橋町 よしだじょうし 4番地ほか	23201	79393	34度 46分 00秒ほか	137度 24分 00秒ほか	20010920～ 20010928 ほか	70	豊橋市陸 上競技場 記録室新 築工事 ほか
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特別事項		
吉田城址	城館・ 集落	古代  中世  近世	土壌  掘立柱建物・溝・ 土壌 掘立柱建物・道路 ・堀・溝・土壌	須恵器・灰釉陶器・土 師器等  中世陶器・土師器等  陶磁器・土師器				





写 真 图 版

# 写真図版 1



1. 調査区全景 (南から)



2. 調査区南壁 (北から)



3. 調査区東壁 (西から)

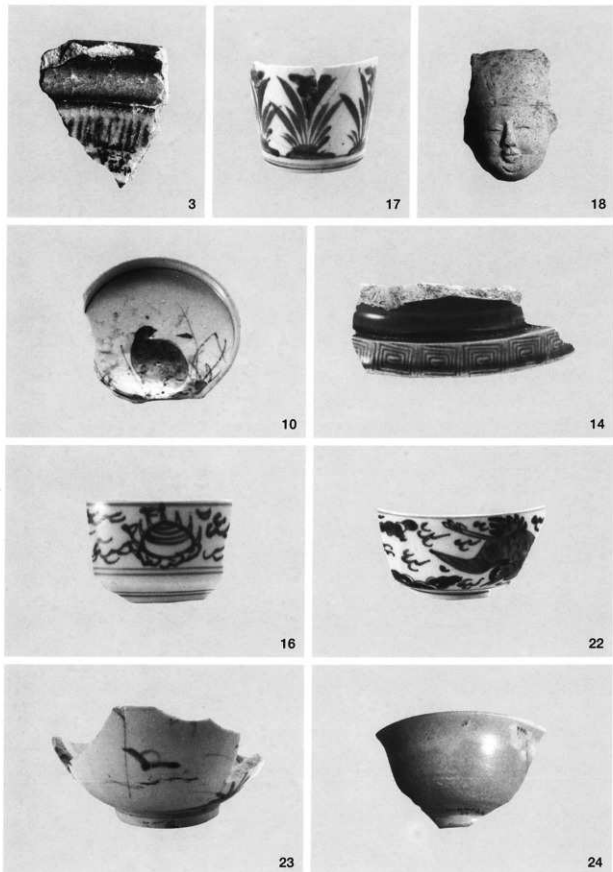


4. SE-1 (西から)



5. SE-2 (東から)

## 写真図版 2



第14次調査出土遺物

写真図版 3



1. 調査区全景-1 (西から)



2. 調査区全景 (東から)



3. B-1区SK-7付近 (南から)



4. B-1区SE-1付近 (南から)



5. B-1区SK-35付近 (南から)



6. 作業風景

## 写真図版 4



1. B-1区SE-1 (西から)



2. B-1区SE-1 断割り (西から)



3. B-1区SK-19 (西から)



4. B-1区SK-43 (南から)

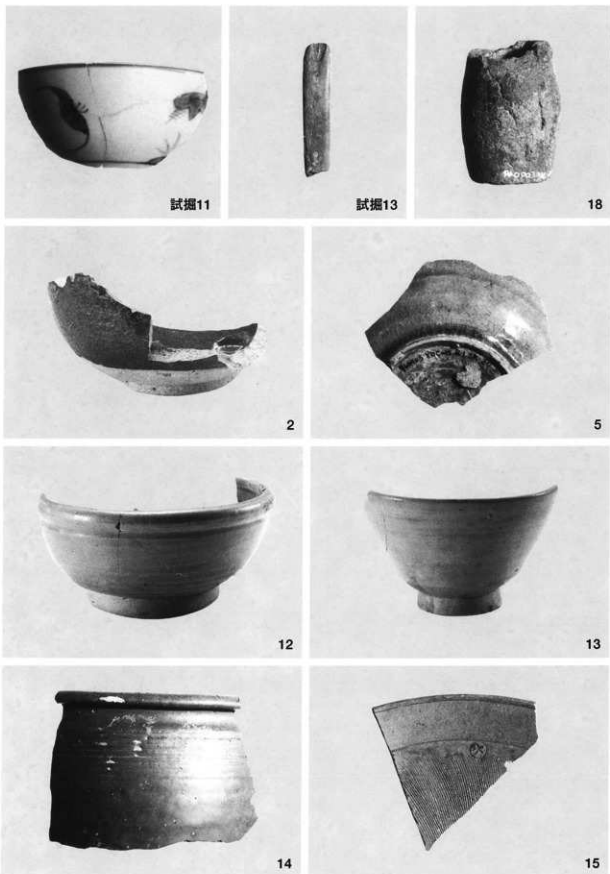


5. B-1区SK-35 (東から)



6. A-1区SK-1・2 (南から)

写真図版 5



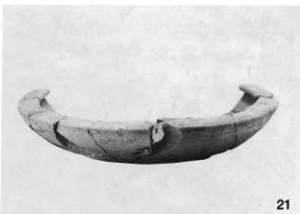
第15次調査出土遺物-1



写真図版 6



20



21



23



31



34

写真図版 7



1. 調査区全景 (北から)

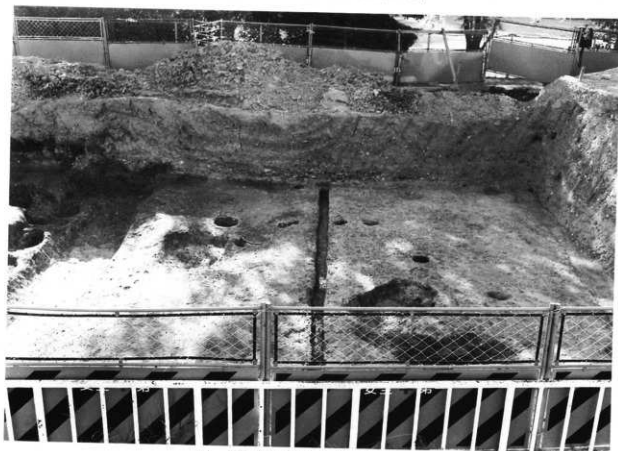


2. 調査区全景 (南から)

写真図版 8



1. 道路（川毛通）全景（南東から）



2. 道路（川毛通）全景（東から）

写真図版 9



1. 排水溝①（東から）



2. 側溝と石抜き取り痕（東から）



3. 排水溝①埋土（東から）



4. 道路基盤に敷かれた小礫（東から）

## 写真図版 10



1. 道路（川毛通）土層断面（東から）



2. 道路（川毛通）土層断面（南東から）



3. 側溝の埋土（東から）



4. SK-1全景（東から）



5. SK-3全景（東から）

写真図版 11



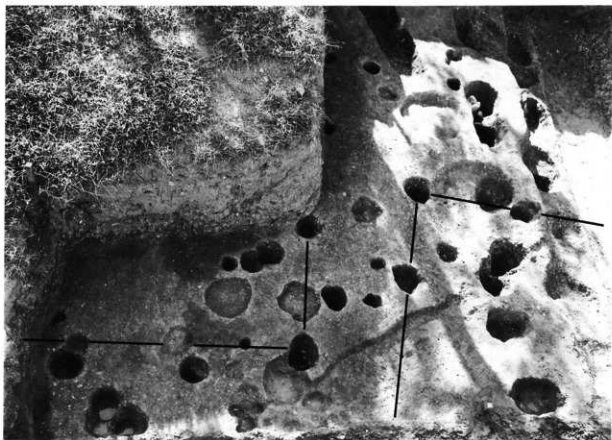
1. SA-1・2 全景 (東から)



2. SA-2 P1 (東から)



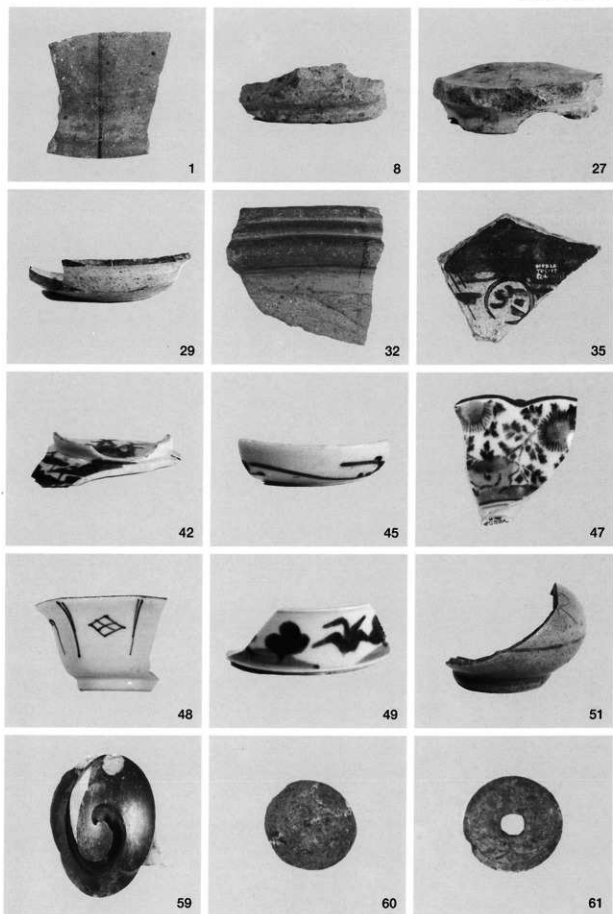
3. SA-1・2 P5・6 (南から)



4. SB-1・2 (東から)



## 写真図版 12



第19次調査出土遺物

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第63集

吉田城址(V)

2002年3月22日

発行 豊橋市教育委員会◎  
教育部美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3番地の1

印刷 (有)豊橋企画